

---

# 異世界人の憂鬱

松竹梅秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界人の憂鬱

### 【Nコード】

N1006T

### 【作者名】

松竹梅秋

### 【あらすじ】

ハルヒに異世界から呼ばれたというのは聞いたけど、涼宮ハルヒの原作を読んだ事があるという事以外すべての記憶を失ってしまった俺。しかも、ハルヒとか長門とかの情報操作を全く受け付けない存在・・・らしい。とりあえず、どうやって生きて行こうか？

文才ゼロが後先考えずに書いた作品です。どうかご容赦を。

## 神の使いの通達（前書き）

5. 2 2 タイトル変更

## 神の使いの通達

身体が重い。

そろそろ起きなければと目を開けた。

「ここは、どこだ・・・？」

寝起き特有のだるさがのこる意識のなか、身体を起こし、見覚えの無い部屋の中を見渡すと知らない女の人がベッドのそばに立っていた。

「おはよう。」

彼女は笑う。何処か悲しそうに。

金髪碧眼、白いワンピースを着た彼女はあふれんばかりの神々しさを放っていた。

「あなたはだれですか？俺はどうしてここに？」

「私は神様の使いってところかしら？一般に人が思う神様のイメージを具現化したもの、って言った方が正しいかも。」

「こんな事言っただけで信じてもらえないかもしれないけど、あなたはこの世界では異世界人よ。ここは涼宮ハルヒの世界ってところかしら？こんな事になってしまっただけでごめんなさい。でも、あなたはあちらの世界には帰れない。涼宮ハルヒに望まれてしまったから・・・」

俺は涼宮ハルヒシリーズを読んだ事がある。俺の読んだ初めての

ライトノベルで、周りには恥ずかしくてとても言えないが些細な事で泣いてしまう俺は消失でのキョンのおかれた立場に涙腺がとまらなかつた。

しかし、あれは俺の知ってる限りフィクションのはずだ。

でも、この状況をどう説明する。

知らない部屋に、人間離れた神々しさを放つ、自称神様の使い。

「あの・・・」

頭が混乱していた俺が出せた言葉はせいぜいこれぐらいだった。

「あなたにはこの世界でいきてももらいます。安心してください。この世界に異世界人はあなた一人です。原作を知っている、という事に関しては神様パワーで誰にもわかりません。あなたが話さない限り。」

安心していいのかダメなのか判断はつかなかったがなぜかほっとした。

しかし、とおれは自分をおちつけるようにゆっくり話した。

「でも、異世界人は原作には登場しなかったはずです。」

彼女はベッドにこしかけると、おれに目をあわせる。

「ここからが、重要です。」

「あなたの知っている原作とこの世界は少し違います。あなたの世界の原作は今のところ異世界人が原作に関わっていないという状態です。しかし、その異世界人はあなたではない。」

深く呼吸をする。

更に彼女は俺の手を握って言った。その手は少し冷たかった。

「つまり、あなたはあなたの好きなように行動して良いということです。平行世界、パラレルワールド。行動が原作を変えるでしょうが、あなたの世界の原作を変える事はありません。何も、気にする事はありません。しかし、行動が原作から逸れる原因となり、より悪い方向、良い方向へ向かう可能性になる事はお忘れなきように。」

その一言で俺は冷水を浴びせられた気分になった。

「ちよっとまってくださいっ！」

「それじゃ、俺はいきなりこの世界につれてこられて重い責任をおわせられたということですか！？しかも今さっき言いましたね？異世界人は一人って・・・」

彼女の目が俺から逸れる。俺の手を握る力が強くなる。

「未来をしているという事が重荷になるという事はわかっていますが、あなたからその記憶をけしたりすることはできません。そして異世界人は一人だけ。超能力者も、未来人も、宇宙人も仲間がいますが、あなたにだけは・・・異世界人仲間というのは存在しません。」

孤立無援の状態だ。一体どうやって生きて行けという。

この知識は三つの組織すべてから狙われる原因になるだろう。

まず何より、おれにはゆっくりと考える時間がある。

「今さっきもお話したように必ず原作に介入しなければならぬ、という決まり事はありません。あなたの自由です。」

沈黙が部屋を支配した。考えようとする頭が、働かない。

「ですが、そうですね、時間が必要でしょう。」

「期間は涼宮ハルヒが七夕の夜にミステリーサークルを書くまで。言っておりませんでした、今はいつでもありません。ですからあなたは涼宮ハルヒと同じ年代に生まれた孤児という事にしましょう。」

「孤児という設定ですが、すみませんが譲れません、あなたは異世界人ですから。身体はまあ身体時間を逆行させれば問題ないでしょう。」

一方的にしゃべる彼女に、俺は一言も言う事が出来なかった。証拠がなさすぎる。何を根拠にと、憤慨してやりたくなってきた。

「七夕以降、あなたは涼宮ハルヒの力により情報操作などの力をい

っさい受け付けなくなります。それがたとえば涼宮ハルヒによる情報操作だとしても。」

彼女は部屋から出て行こうとしながら俺に向けてとびきりの笑顔で「??まるでいままでのシリ阿斯な空気を蹴飛ばすように??こういった。」

「私が望む事はただひとつ!あなたにこの世界を楽しんでほしいという事です!」

パタンと扉のしまる音がする。

そして俺は気づいた。

??俺が涼宮ハルヒシリーズを読んだことがあるという事以外の記憶をすべて失ってしまっているという事に。

## 神の使いの通達（後書き）

やってしまった。

突発的に書いてしまいました。がこれからどうなるかわかりません。

だいぶ長い間原作を読んでいないので、

矛盾点など不可解な点が多いと思います。

なまあたかく見守ってくださいとうれしいです。



## 異世界人の記憶

一歳くらいの頃、俺はその孤児院に捨てられていたらしい。

現在、小学六年生。

自称神様の使いが言った通り、俺は孤児という設定だった。

俺が異世界人であるということを改めて自覚したのは小学二年生ぐらいだっただろうか？原作の知識などを思い出したのが丁度そのころだったからだ。

だからまあ、それまでは子供らしく過ごせていただろう。

完全に思い出してからには精神年齢もぐつとあがったし、多々不自然な点は見られただろうが。

俺が思い出してから、自分の記憶についてわかった事がいくつかある。

まずはこちらに来る前の大体の年齢だ。

なんでこんな事がわかったかといえば、記憶喪失といっても失われていたのはエピソード記憶だけで、意味記憶は失われていなかったのである。

思い出しながら徐々にに学校の問題がえらく簡単、なんだこれ、と思うことが増えていったのである。

「やなぎー。やなぎちゃん！おい、まてよやなぎー！」

本屋まで追いかけてきたやつはクラスメイトの圭介。ちなみにやなぎというのは俺の名前。孤児院でもらった名前は松原柳というグリ

ーングリーンな名前だった。ちゃん付けだが俺は男だ。

「やなぎちゃんってばー。おかねもってないのにほんかうのかー？」

「ううん、きょうはしたみだよ。」

「したみてなんだー？」

精一杯子供らしくふるまっているつもりだ。時々空回るが。

「けいすけはおうちにかえりなよ。すぐかえるからさ。」

これから参考書コーナーで学力を検証するのをあまり人に見られたくない。変に孤児院とか学校で知られると噂になったり、最悪いじめの原因になるかもしれないからなあ。

「わかったー。こうえんであそんでるからおまえもこいよー。」

そうして俺参考書コーナーへ一直線。

結果は、高校卒業レベル。

参考書コーナーにあったものはほぼ完璧に理解していたし、公式なんかは覚えていた。

ちよっとした有名大学の赤本も手に取ったが、これもなんとか解けた。

そんなこんなで、参考書を物色していると、

「そのぼく、本屋は遊ぶところじゃないんだよ。」

店員さんに叱られた。たしかに、ランドセルを背負ったいかにも学校帰りの小学二年生がこんなレベルの高いとこにいたらなんかシュールだ。

「ごめんなさいっ。」

そして俺は本屋から追い出される形で出て行った。目的は達成されたしまぁいいだろ。

話は今に戻るが、おかげで勉強なんかに全く苦勞していない。ただ、算数で数学の知識を使いたいのを抑えてる程度だ。ふつうの公

立のはずなのに授業で私立の入試問題を叩き付けてくる熱心な教師がいるからだ。そしてこの教師は養護施設に訪ねてきて、こんなことをいった。

「柳君はとても賢くて、成績も学年で一番です。一学年で三百人もいて、中には私立の受験を考えて塾通いしているお子さんもいらっしやるのにです。」

俺は塾に入っていない。ただの異世界人補正だ。時々塾通いのやつらから孤児という事もあり、白い目で見られるがまだいじめにはなっていない。だからといってテストで手を抜くのは何かいやだった。

「奨学金を検討して、是非私立の方に受験されてはいかがでしょう  
か？彼の實力なら十分、全額で返済なしの奨学金を取れるでしょう。」

言いたい事だけしゃべって帰って行った。教師にその目には少し大人びている優等生にきちんとしたところで勉強してもらいたいという希望が燃えていた。

施設長はいい人だ。施設はかなり恵まれている方だろう。ニュースとかでたまーに聞くような変な事はないし、なにより施設の人は皆やさしい。だから子供は皆良い子に育つ。高校生ぐらいになったひとたちはアルバイトして、お金貯めて、一生懸命一人立ちの準備をする。社会人になったひとたちは何らかの形でこの施設に恩を返していた。

施設長は思案顔だ。施設から私立、というのはかなり珍しいのである。それに俺は孤児だ。なんのバックアップも無い。

「柳、どうする？僕は君が私立に行きたいというのならそれもいいと思うのだが・・・孤児だという事は気にしないでいいよ、今さっき担任の先生がおっしゃっていたように君は頭がいいからね。どうにかなるだろう。」

彼は穏やかに俺に語りかけた。いい人どころじゃない、聖人のような人だ。その顔は慈愛にみちている。俺が女だったら惚れていただ

ろう。

ここで俺は後一年半であるの七夕になる事を思い出した。そろそろ最低でも原作から離れるか、離れないかを決めなければならない。そして、公立にいった場合は涼宮ハルヒのいる東中に行く事になる。

「一晩考えさせてください・・・」

考えさせてください。この世界に来てこの言葉の持つ意味はさらに大きくなった。

「そうだね、まだ四月だ。ゆっくり考えなさい。返事は明日じゃなくてもいいよ。私立に行くのなら全力でサポートするから。」

俺の深刻な表情を読み取ったのだろうか、なだめるようにいいながら彼は部屋から出て行って、パタンという音がした。

四年間の考える時間は終わりました。そろそろ答えをだしてください。

異世界人の記憶（後書き）

うーん。

## 未来の超能力者

受験を勧められてから三日経った。

原作と離れて暮らすというのもありだろう。ボロを出さないように過ごすというのは案外難しいと思うし、原作の知識ゆえに狙われるとかの心配も無い。

しかし、せっかくの異世界人なんだからというどうしようもない好奇心がまだ俺の中でくすぶっていた。

今日中には答えを出したいと思いながら放課後の教室で読書していた。ここ数年間は本当にやる事が無かったので読書ばかりしていた。小学校高学年にもなると圭介達はテレビゲームばかりするようになり、当然、孤児の俺はそんなことできないので話題から取り残される形となった。

「やあ、松原。」

なんか美形が話しかけてきた。

「忘れ物したんだ。これから塾なのに筆箱もって帰るの忘れるとか、話にならないよな。というかこんな時間までのこって何やってるんだ？」

俺に塾関連のことを話す奴は大抵俺を煙たがっているやつらだ。嫌みか。

「あまり早く帰ると学校で友達がいなかった、施設長が心配するんだ。塾がんばれよ。」

嫌みには嫌みで応酬を。塾に喜んで行く子供はなかなかおるまい。

「・・・ちよっと相談にのってもらってもいいか？」

「なんだ？」

少しばかりの沈黙。了承ととったのか俺の前の席に座る。少し周り

を気にしているようだ。

「俺、小学校卒業したら親父の転勤で隣の町に行くんだ。当然、受験もそこから通いやすいところになるんじゃないかと思う。」

「なるほどな。でも、ここからも同じとこ受験する奴はいるだろ。」

受験したらあまり町とか関係ないからな。県外とかならべつだがな。」

「いや、そういう事じゃなくてだ。・・・毎日受験勉強ばかりでいい加減つかれたんだよ。普通に公立中学にいつて、自分のやりたい事をやりたいんだ。でも、うちの親は受験してどれぐらい良い学校にいけるかしら興味ない。」

「・・・そりゃ、災難だな。勉強ってのは、お前のやりたい事じゃないんだな？」

美形は窓のそとの赤い太陽をみて、少し考えてからいった。」

「ああ。」

「松原は塾とか言っていないのに頭良いよな。だけど、受験とか考えてるようには見えない。お前が頭良いのは勉強がお前のやりたいことなのかって思ってたんだけど、違ったのかって思ってた。話しかけてみたんだ。」

そういうお前もかなり賢いだろ。小学生でここまで綺麗に話をもつてくのもなかなかのもんだ。って、小学生を下に見すぎか？

「俺にとつての勉強がなんなんだか、よくわからないけどさ、まあの性に合ってるって感じかな。手を抜きたくないってのはあるし、解けたら解けたでなかなかおもしろいな。」

これは本音だ。

「なるほどな。」

きーんこーんかーんこーん。完全下校を知らせるチャイムがなった。早く帰らねば。美形ががたと立ち上がった。

「やばい、塾遅れる。ごめんな、いきなりいろんな事きいてもらって。」

「いや、いいんだ。暇だったし。相談といってもアドバイスできない

かったしな。というか、お前の名前は？」

「そんなことない。すっきりした。古泉一樹だ。隣のクラスの。じやあまた！」

本当に俺の意見で踏ん切りがついたのか、少年は屈託の無い笑顔で去って行った。

というか、古泉一樹だと？原作キャラじゃねえか。

その、屈託のない笑顔が気になった。

原作じゃあいつも微笑をその無駄に美形な顔にたたえていて、うさんくさい奴だったんじゃ、なかったのか？



## 異世界人の決断

「おい、松原、今暇か？」

昼休み。古泉が話しかけてきた。

受験するか、しないかが分岐点だと思ったのは勘違いだったか？

まあ、北高に入らなかつたら物語に参与するという可能性はほぼゼロパーセントになるハズなんだが、何故タイムリミットは七夕までなのだろう？

「ん、大丈夫だ。」

今古泉と関わる事が分岐点ということは無いだろう。

変に友情を持ってしまったら、逃げられなくなるという可能性はあるが。

ヘタしたら命を張らないといけなかもしれない高校ライフに友情だけで突き進むのはどうかと思ってしまった自分を少々嫌悪してみる。

「てか、柳ってよんでいいか？小学生なのにお互い名字で呼ぶって、なんだか小学生っぽくない気がするんだ。」

古泉がフレンドリーだ。想像できない。こっちも反撃にでてやろう。というか、小学生ぽくないって考える時点で小学生ぽくない。

「かまわないよ、いっちゃん。」

「は、いっちゃん？ああ、一樹だからか。そんな呼び方する奴初めてだ。あれ、俺あだ名で呼ばれたの初めてかもしれない。」

冷静に受け止められた。もっと動揺してくれたら作中とのギャップが激しくて面白いのだが。あだ名で呼ばれるのが初めてかもしか、どこぞのキョン君が羨むかもしれないな。

「じゃあ、これからは俺がいっちゃんと呼んでやろう。喜べ。」

「まあ、そういうのも悪くはないかもしれないな。」

と、苦笑いする古泉はやはりあどけなさが残る少年にしか見えない。原作知っているから、というだけで傍観者を気取ってしまう俺にはそう見える。

「てか、俺に話しかけたのって柳って呼びたかったからってだけか？」

「そう。」

「じゃあ、今度は俺の相談に乗ってくれないか？」

こいつなら、受験関係の話を持ち込んでもいやな顔されるまいという確信に似た思いがわいてきて、不意に口に出してしまっていた。

「ん、いいが。」

古泉はなにか珍しいものを見た子供のような目で俺を見る。俺が悩みが無いとでも思っているのか？

「俺が、養護施設にいてのはしってるだろ？」

「ああ。受験するやつはみんなしってる。有名だよな。」

道理で、勉強に疲れた奴らが羨望と嫉妬の眼でみてるのか。

「自分の口から言った記憶はないんだがな。」

「どんな問題もスラスラって解くお前がどんな塾に行ってるのか気になってるやつは多いんだ。柳はどこにもいってないって言うが、陰ではいってるんじゃないかってな？まあ、詮索好きのやつらが調べて結果孤児だって知って愕然とするんだよ。まあ、嫉妬と言った方が正しいだろうが。」

余計な奴らもいるもんだな。ただの異世界人補正です。とは、とても説明できない。

「お前がはじめ受けてないってのがすげーよ。真っ先に標的になりそうなの。」

それは否定できない。ただ、友達が少ないだけだ。むしろいいない？いや、圭介たちとは話してるからな。ゲームの話題以外なら。たまに。

「たしかにな。で、まあ俺は頭がいいらしいんで受験を勧められた

んだ。担任に。奨学金があるから心配せずに受けてみたらどうだ  
て。」

「ああ、言いそうだな。お前のとこの担任なら。」  
単刀直入に言うしか無いかな？

「どうしようかと悩んでるんだ。これが人生の分岐点になるかもし  
れん。」

古泉は一瞬あきれたような顔になり、

「人生の分岐点って大げさだな。お前のジョークも面白いかもしれ  
ない。まあ、受験に落ちたらなんて言われるかって位で、お先真っ  
暗って訳じゃ無いだろ。気楽にやれば良いんだよ。気楽に。」

笑い飛ばされた。たしかに、俺は異世界人です。といっても今のこ  
いつが信じないように、少々いろんな過程をふつとばした受験の話  
を持ちかけても何の解決にもならないか・・・  
しかし、あまり具体的なことを言うとは後々勘ぐられても叶わん。

「俺はお前にやりたい事をやりたいって相談したよな？」  
こないだのことか？

「ああ。」

「自分がやりたいようにしたらいいんじゃないか？」

「そうだな。ありがとう。」

自分がやりたいように、か。

わくわくする人生を送りたい。

きっと、前の世界ではそう思ってた。

宇宙人が、未来人が、異世界人が、超能力者がいたら良いのに、と  
か。

自分がそうだったら良いのに、とか。

自分をわくわくする非日常へと連れ去ってくれたら良いのに、とか。

きっと誰もが一度は思う事で、それは決して否定する事は出来ない。ただ、世の中の常識とか言うやつにそんな事は決して無いと否定され、半ば絶望しながら生きているのだ。夢を見るのは悪だと、言われた気分になって。

今、平穏な人生を送っている。何か物足りない。

不思議を隠すカーテンの向こう側に行く切符を俺は持っている。

カーテンの手前だけで幸福を探さなければいけない、絶望した人たちとちがって。

すぐ手が届くところに不思議が転がることを知っているのに何もしないなんてどこの嘘つきだろう。臆病者だろう。

困難が待っている、というのはただの想像でしかない。

確定した事じゃないだろ？

それにおれは、当事者になれるチャンスを持っている。

気楽に、という古泉の言葉を信じてみるのもありじゃないかと思った。

そして、卒業式。

古泉は無事市外の私立中学校に合格し、俺は東中に進む事になった。

三年間のお別れだ。

## 異世界人の決断（後書き）

早く原作に突入したいあまりに・・・

イノシシのようにいろんなものを蹴飛ばしながら

この物語は進行します。

細かい事は気にしてないので、

矛盾が多々発生すると思いますが、

気になる場合は

スルー、またはご指摘お願いします。

## 異世界人の日常

涼宮ハルヒとは別のクラスみたいだし、何の興味も持たれていない。

というか、毎日ものすごく不機嫌そうなのだ。

きっと、本人は不思議を探しているのだろうが、

あの状態じゃきっと周りが見えていないに違いない。

原作の、序盤みたいな状態がこの三年間続くのであろうか？

そしたらきっと俺は東中に来た事を後悔する。

なぜなら涼宮ハルヒの出す憂鬱オーラも、その行動もクラスを越え、学年を越え、学校中の皆を被害者にしてしまうからだ。

空手部に入部し、つつがなく中学校生活を送る俺は聞いてもいままさな授業をばけーっと過ごしながら原作を思い出していた。

原作の知識については、靄がかからず鮮明に思い出す事ができるという事に気づいたのは割と最近だ。

古泉とはメールを交換しあう仲である。

そっちの中学はどうだ？とか、友達できたか？とか。

未だ、他愛のない情報交換を楽しんでいる。

時々俺に、勉強の質問しに電話をかけてくる事もある。

もう塾は行っていないらしい。

「柳っ！柳っ！」

なんか怒鳴られてる？俺。

「はい？」

「はい？じゃないだろー。いくら呼んでも無視しやがって。」

おなじみの圭介君である。俺の交友関係はものすごく狭いのだ。

「すまんすまん、ぼーつとしてた。」

「そんなんじゃないとお前、いくら頭よくてもすぐ老後みたいになるぞー。精神的な部分で。もともと何か父親みたいな雰囲気なのに。」

父親で。うーん、前世の蓄積分のおかげか少々包容力が大きいと勘違いされがちなのだ。中学生見ても、まだまだ子供だなーと微笑ましく思ってしまうからな。

「あと、自己分析しすぎだ。何だ、あの自己紹介カード。あんなに自分の性格について書く奴いないぞー。もはや考察だなあ。」

自己紹介カードはクラスの女子が配ってた。何人もの女子に配られて正直面倒で、内容が同じ変わりに分量で勝負した。

「お前、ただでさえ口数少なくて、しゃべりかけられないとしゃべらないんだからさ、もっとしっかりしてないと、いろいろ置いて行かれるぞー。」

「ああ。ありがとう。」

そういつて、圭介は去って行ったのだが忠告の為だけに話しかけてくれたのか？

小学校からの付き合いだが、不即不離の関係を続けてこれたのはこいつの優しさからかもしれない。

で、まあ友人が出来た。数名。

部活のツテなんかで仲良くなった奴とかじわじわと交友の輪が広がっていったのだ。小学生の頃は圭介か古泉としか話さなかったものだから、非常に大きな進歩かもしれない。

そして、その中に涼宮ハルヒと同じクラスでおなじみの谷口が含まれていた！

さらに不思議な事に、お昼になると何故か同じクラスではない谷口と圭介が乗り込んできて、一緒に食べろと強要するのだ。

「てか、小学生の頃あまり話さなくなってたのに、いきなりどうし



「たんだ？中学入って。」

圭介に尋ねた。

「良いじゃないか柳ちゃん。というか、俺らのクラス涼宮がいるだろう？」

「ああ。」

知っているとも。ちなみに谷口と圭介は同じクラスだ。

「あいつの不機嫌オーラのせいで、いろいろクラスがこじれちゃって居づらいんだ。俺も圭介もそこから逃げ出したいってわけよ。」

「なるほどなあ。で、俺のクラスか。」

「ああ、柳ちゃんはお父さんの存在だからなー。無口だけど、なんかそこが頼りがある雰囲気をもっとパワーアップさせてるんだよ。」

「Aランク+の女子が柳の事好きって噂が流れてるんだぜ。知ってたか？」

知りませんとも。

「まあ、俺たちはあのクラスの雰囲気に毒されないためにこっちに來てるってわけだ。」

「ついでに柳ちゃんに癒されにねー。」

「お父さんのポジションなのに見た目中性的で、一歩間違えたら美少女だもんな、

柳は。今すぐ性別変えてくれ。男と弁当食べるよりよっぽど楽しいにちがいねえ。」

「・・・それ以上言うな。」

「はい。」

いい返事である。

そんなこんなで、涼宮ハルヒの神的察知能力に未だ察知されず中学生活を満喫していた。まだ、異常な情報フレアが起こっていないの

かもしれない。

しかし、それは突然やってきた。

異世界人だからか？ 気づく事が出来た。

世界が見えない波に飲み込まれてしまったような感覚。  
空気がそれまでと明らかにちがうと、肌で感じていた。

ああ、世界が変わったと思った。

しかし、まだ七夕は訪れていなかった。

## 異世界人の日常（後書き）

タイトルに（仮）がついたままで外せない・・・  
なかなか思いつかないもので。

## 超能力者の行方

やばい。

神の不機嫌がビシバシ伝わってくる。

こんな異世界人補正はいらないです。

超能力者さん、怖いかもかもしれませんが早く涼宮ハルヒのストレスを退治して下さい。

季節は春から夏になり、中学校生活も安定の兆しを見せ始めていたが、

俺の生活は、情報爆発の頃から少し変化を見せていた。

一つ。

前述通り、ハルヒの神様パワーを感じ取れるようになったのである。情報爆発が起これると自分以外の空気？が作り替えられて行くような感覚になる。

例えば、閉鎖空間。

あの辺で発生したな、っていうのがわかる。

入って行けるのかは定かではないが、とりあえず変化を受けない俺があそこに干渉しようとしたらどうなるのだろう。ちょっと気になる。

二つ。

バイトを始めた。施設長さんはそんな事まだしなくていい、というか、まだ労働基準法に違反するからダメ。といったのだが、俺にはお金が必要だったのだ。今。

幸い、お手伝いという形で俺を働かせてくれるドラッグストアがあ

った。

たまたまその店長さんと知り合いになったのである。

そして、菓子料として一時間に500円も払ってくれているのだ。日給制で。

最低賃金には満たないが、中学生にお金を払ってくれている分ありがたい。

三つ。

これが最懸念事項である。

・・・古泉と連絡が途絶えた。

思い出す。

機関の迎えが無ければ自殺していたかもしれない、とキョン君に打ち明けていたのを。せっかく仲良くなった友人が追い込まれているのだ。それをほっとけるほど、俺は冷たい人間では無い・・・はずだ。

しかし、こうも思う。

こうなるとわかって、古泉に何も言わなかったのは誰だ、と。

しかし、行動を起こさねば変わらない。

だが、俺の事を話す事は出来ない。

三年間のお別れと思っていたが、再会を果たしてやる。

俺は小泉に会いに行く為にバイトをしているのだ。

相談相手になるくらいは出来るんじゃないかと信じて。

訪れたある日曜日。

一週間前から毎日「日曜日に会いに行くぞカウントダウンメール」を古泉に送り、今日会いに行く事をアピールし続けた。返信は一通も来なかったが。

そして、苦勞して古泉の家にたどり着いて呼び鈴を押した。  
ピンポン。

「どちらさまでしょうか？」

古泉のお母さんだろうか？

「松原柳と申します。一樹くんの小学校の頃の友人で・・・」

「柳ちゃん？一樹から聞いた事があるような・・・ちょっとまってね。」

やはり古泉は俺のメールをみていないのだろうか？

かなりの確率で、俺が行く事を家族に伝えてないらしい。

ガチャリ、と扉が開かれ出てきた一樹のお母さんは美人だった。

この親あつてこの子あり、といった美貌だ。なるほど。

「すみません、わざわざ来てくれて。」

「俺も突然来てすみません。突然音信不通になって吃驚してたんです。いっちゃんには一週間前から行くぞ行くぞってメールしてたんですが・・・」

古泉は、実はマメなやつなのだ。

一週間にいっぺんは向こうからメールしてきてたし、

俺の返信には一時間以内に返してきた。

「あの子は・・・その・・・今入院してて・・・」

機関につれていかれた後なのか？

原作では出てくるのが確定しているが、こう聞かざるを得ない。

「え、大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ。最初こそ酷かったけど。今はだいぶ落ち着いているらしいわ。」

やはり、しばらく直接会っていないようだ。

機関説が濃厚になる。

「会うのは・・・」

「ごめんなさい、ちょっと難しいかも。」

「そうですか、突然訪ねてきてすみません。」

「いえ、一樹のお友達が訪ねてきてくれただけでもうれしいわ。」

お母さんの目には悲しみの色が浮かんでいた。

よく見ると、化粧で隠れてはいるが目の下にはクッキリと隈があり、  
ーずっと泣いていたのだろうか、何度も目をこすった跡がある。  
赤い。

声も少々鼻声だ。

どうぞ、と大量のお菓子をもらい、何かあったら、と連絡先を古泉  
のお母さんに教え、帰宅の途についた。

これは、古泉が食べるはずだったものだろうか？

俺は、古泉の家族に腫れ物を触るような、余計な事をしてしまった  
だけなのか？

この行動が、罪悪感からくるものではないと信じたかった。

## 超能力者の仲間（前書き）

5. 24 誤字修正



## 超能力者の仲間

帰り道。

大量のお菓子の入った大きな紙袋を持って駅までの道を行く。

まだまだ太陽は高く、午前11時ぐらいだろうか。ヘタしたらこの時間帯から一日が始まる奴もいるのだが、古泉にはちっとも会えず、一日の予定は大きく狂ってしまった。

結果、暇を持て余さざるをえなくなる。このまま真っ直ぐ帰っても、おもしろくない。折角の休日なのだ。

しかし、天は俺を見放さなかった。

というか、巡り合わせの運が良すぎると思う。やっぱり、原作に参加して欲しいと思ってるんだろうな。神様としては。

「少々、よろしいでしょうか？」

見た目、若い女性。長い髪を後ろで二つにくくった、笑顔の女性が話しかけてきた。見目麗しい。

「はい？なんですか？」

「古泉一樹を病院で世話してる森園生です。わざわざ訪ねてくださって、ありがとうございます。」

はい。機関説確定。

「いえいえ、いっちゃんは大丈夫なんでしょうか？今さっきお母さんから聞いたのですが、しばらく会ってなさそうな雰囲気でしたので。」

ちよっと、森さんの警戒心が強まった、気がした。しかし、相も変わらず笑顔である。

「ええ、問題ありません。松原君が訪ねてくると一樹の携帯に入っていたので。」

「そうですか。ちゃんと読んでもらえてたんですね。」

森さんは品定めするように俺を見た。なんだなんだ。考えているの

か？

そして、すーっと森さんの後ろに黒塗りのタクシーが止まる。

「古泉に、会って行ってもらえませんか？」

もちろん、その答えはイエスだ。

「古泉は少々おかしくなっている、と思うかもしれませんがそれは違います。」

現在車で移動中である。俺は後部座席に。森さんは俺の横に座って説明し始めた。ドライバーは荒川氏だろうか？アニメのイメージとほぼ当てはまるから、そうなのだろうが。

「あなたが古泉と連絡をとれなくなった時期に、ある大事件が起きました。それこそ、世界を揺るがすような大事件です。その証拠をまずは見ていただきたいのです。」

「そんな事件が起こっていたら、もっと騒ぎになっていると思うのですが。」

至極真つ当な、一市民の意見を述べてみる。慎重に、全て知っているのと悟らせてはいけない。俺の演技力がかつて無い程機能していた。「隠す必要があるのです。知っているものは、本当にわずかなのです。本来ならばあなたを巻き込む訳にはいかないのですが。大事件の結果、古泉の精神はめちゃくちゃになりました。彼はもう、あなたの知ってるどこにでもいそうな少年ではありません。私たちも最善を尽くしましたが、心を開いてはくれないのです。」

「そこで、あなたにご協力願いたいのです。調べさせていただきますでしたが、あなたは古泉の小学校で一番仲のよかった友達みたいなのです。しかし、事が事です。今なら引き返せます。」

俺が一番仲が良かったのか。それは初めて知った。でも、俺を引っ張りだしてまで古泉を心配しているという事は相当酷いのだろう。

「いえ、大丈夫です。むしろ、世界を揺るがしかねない大事件を知

らないって方が気持ち悪いですし。というか、それで古泉がめっちゃめっちゃになったってなら、余計見過ごせません。」

森さんは「そうですか。」と言ったあと、沈黙してしまった。タクシーは発生しすぎてどこにあるか把握するのもばかばかしい閉鎖空間のある方向へ向かっていた。静かになった車内で音を立てていたのは菓子袋だけであった。

やがてタクシーが止まると、料金を請求せずに去って行ってしまった。太陽が丁度真上にある。雲一つない快晴だ。場所は東中。校門の前に俺たちは立っている。

「あの、こんなところに証拠があるんですか？てか、俺の学校なんですけど。」

たしかに閉鎖空間はこの前にあるようだ。そういった空気が感じられる。

「条件が揃いませんと、お見せできないので。偶然です。目をつむってください。すぐ終わりますから。目を開けたとき、あまり驚かないでください。」

いわれた通りに目をつむる。というか、俺入れるのか？閉鎖空間にはじき出されたり、破壊したりしたら、目を付けられるところの話じゃ無いかもしれん。

森さんは俺の手を取ると一歩、二歩と前に進み、俺は言いようの無い気持ち悪さに包まれた。

**超能力者の部屋（前書き）**

5. 28 一部修正

## 超能力者の部屋

灰色空間の中はまさに不機嫌と憂鬱とその他もろもろ――不安とかを溶かし込んだような空気だった。もしかして、超能力者の皆さんもこれを感じているのだろうか？少なくともここは長居したいと思うような場所ではない。

神人は景気よく校舎を破壊した後のようで、向こうの方で更にビルとか住宅とかを破壊しているようだ。巨体の腕を鞭のように振るう。ドンという地響きが絶え間なく繰り返していた。赤い玉が既に空中に浮かんでいる。

「これが世界を揺るがす事件の一つです。この空間を生み出す人物によって、古泉は力を与えられました。あそこで建物を壊している巨人を我々は神人、と呼んでいます。その神人を倒す力を与えられたのです。」

神人が破壊したあの辺りは、養護施設のあるあたりだろうか。我が家はこの世界で何度破壊されたのだろうか。

「超能力者、と言ったらわかりやすいでしょうか。この場合、神人を狩る者です。あの赤い玉をご覧ください。我々の仲間です。そして、古泉も。」

森さんは説明を続けた。閉鎖空間、超能力者の存在、世界の危機と古泉。俺がショックを受けていると思っただけでくれたら良いが。いや、実際ショックを受けているのだ。読むのと見るのではまるで違う。百聞は一見にしかずだ。見慣れた風景はもはやない。空が灰色ってところが唯一の救いだ。これは現実世界じゃない。

「ショックを受けるのも、無理はありません。実際、古泉も部屋から出てきてはくれませんか。」

そう言って、森さんの話に一区切りがついた。ふと、神人がこちらを見た気がした。神人と目が合う。

すると、神人は不気味におとなしくなってしまった。

そのまま神人と見つめ合う。

「これは・・・」

森さんの口から驚嘆の声が漏れる。原因は俺か？

赤い玉の活動が激しくなる。神人が止まった隙に一気に片をつけてしまった。崩れ行く神人が一瞬たりとも俺から目を離す事が無かったのが、印象深かった。

閉鎖空間が崩壊する。ちよつとしたスペクタクルってやつか。

そんな事を思っているうちに、俺はまた雲一つ無い青空の下、東中の前に立っていた。

ガバリと、服を掴まれる。

驚く間もなく、あれよあれよという間に車に乗せられると凄惨な笑みを浮かべる森さんがいた。怖い。神人の事で頭がいっぱいなのに、更に思考停止させてきた。そこまで酷い笑みを浮かべる必要があるだろうか？第四の勢力かなにかと勘違いされてる？いや、ないない。単独行動ですよ。

「このようなことは初めてです。あなたも・・・いえ、そのような事は無いでしょう。あなたは、何者ですか？」

俺が原因だと思われたらしい。十中八九そうだろうが。

「何者と言われても、困ります。」

森さんはまた「そうですよね。」と言って押し黙ってしまった。俺は異世界人設定が無い限り普通の人間なのだ。しかも、口を割らない限りそれは誰にもわからないとこっちに来るときに教えられている。いちいちこうやって閉鎖空間へ招待してくれたという事は、俺が真っ白な、裏の無い一般人だと機関が判断したからだろう。しかし、ああ、さらば俺の一般人生活。余計なところに目をつけられてしまった。

しばらくは大丈夫だろう、と思うが。機関の仲間入りでもさせられたら古泉や生徒会長みたいに演技を強要されるのだろうか。それは

避けたい。

車は東中から割と近い、高級そうなマンションの一角に止まった。セキュリティシステムを見るに、長門の住んでいるところではなさそう。沈黙する森さんについて行く。エレベーターが最上階で止まると、一番奥の部屋に案内された。暗く、換気されてない部屋だ。「古泉、松原君をつれてきました。」

それだけ言うと、森さんは出て行ってしまった。

俺はパチパチと部屋の電気をつけて行く。ゴミや、衣服で散らかっていた。数日に一度は掃除しているみたいだが、やはり汚いという事には変わらない。

一番奥の部屋のカーテンを閉め切った寝室のベッドの上でようやく丸まっている古泉を見つけた。少し、細くなったように思える。

「いっちゃん、起きてるか？俺だ、柳だ。」

バンッと枕が飛んできた。これ、そば殻の枕だ。当たったら痛いぞ。「柳も、俺がおかしいって思うんだろ。どうして俺が、あんなのと、戦わなきゃ、ならないんだ。全部、涼宮ハルヒが悪いんだ。なのに、皆俺がおかしいって言うんだ。」

「まだ何も言っていないだろうが。それに、いまさっき森さんに閉鎖空間とやらに招待してもらった。俺がお前をおかしいと思う根拠なんてもうないぞ。」

わしゃわしゃと髪伸びた古泉の頭をなでてやる。今朝見た古泉のお母さんと、古泉の顔が何となく重なって見えた。隈がくっきりとついていて、泣きはらしたような目元。

「あんな怖いところに柳も行く必要は無かったんだッ！」

なかなか穏やかだった少年は吹きすさぶ嵐のように感情的になっている。自然な、あの笑みが懐かしい。ここで俺は自分はどこまでも理性的に生きてきていて、感情的になった事が無い事に気付いた。どう、話しかけるべきか戸惑う。こんなとき、かけてもらいたい言

葉は何なのだろう？

「怖くはなかったよ。最後なんて、なかなか見物だった。」  
断言できる。俺は説得役に向いてない。

「それに、誰かがやらなきゃいけないんだろ？お前に白羽の矢が立った事には同情を禁じ得ないが。」

すまん古泉。俺は知っていたし、これは規定事項なのだ。SOS団に不可欠の説明役になるには必ず通らなければいけない。原作を壊す事は、恐らくこの世界の有り様に大きく関わるだろう。

「死ぬかもしれないんだ！柳にはわかりっこ無い！」

だから、原作の保持が今の俺に出来る事なんじゃないかって考えてみる。

「じゃあ、ついて行ってやるよ。いっちゃんが行かなくなったら俺は閉鎖空間に行く。俺を助けられるのはいっちゃんだけだぞ。機関の人にお願ひしてみよう。」

なんか臭い台詞をはいてしまった。しかし、俺はキョン君のようなトーキングスキルも主人公補正も無いのだ。無いもの尽くしで困ってしまう。

「では行きましょう松原君。閉鎖空間へ。古泉はどうしますか？」  
外に出ていたと思っていた森さんは俺の背後にいた。これ、なんていうホラーだろう。森さんは俺の手をつかむと、ぐいぐい玄関の方へひっぱっていった。本当に、こんな都合のいいときに閉鎖空間ができたのか？

そして、俺の目の前でドアがボタンと閉じた。



## 超能力者の決意（前書き）

6. 4 加筆

## 超能力者の決意

「おいっ！」

まさか、あいつ追いかけてこないつもりか？ちよつとまった、いくら原作の為とは言えど、閉鎖空間で神人に踏みつぶされて死ぬのはごめんだ。

森さんの手を振り払って、俺はまた古泉の部屋のドアを開ける。

玄関の前に突っ立っていた古泉が目を見開くのを視界に捉えると、森さんがしたように手首を引っ掴んで通路に出る。

そのまま閉鎖空間に引っ張って行こう。うん、そうしよう。

俺が強行手段にでると思っていなかったのだろう、古泉はあつけないとられたという感じである。説得モード全開だ。こんなとき、どうすればいい？

「俺だって死ぬのは怖いんだよ！馬鹿。」

車の前まで来た。古泉を放り込み、俺も乗り込むとタクシーはすーっと前進し始めた。

「なんてことするんだ！」

古泉は俺の襟首をつかみあげている。狭い車内でする事じゃない。

「これは不可避のことなんだ。誰かがやるしか無いだろう。」

俺、これしか言っていないな。

「好きな事をしからない、っていうのは無理なんだ。お前、やりたい事があったんだろ？知らない俺にまで相談してくるぐらい、やりたい事が。やりたい事があるなら、やりたくない事も、しっかりやらないと。」

襟首を掴み上げる力が弱くなったと思うと、パタンと車内に倒れ伏した。

「ちくしょう。」というつぶやき声がやたらと車内に響いた。

空は天高く、青々としている。しかし、手を引かれて一步踏み入れればそこはうってかわって鈍色の閉鎖空間だ。車内に残っていた古泉を無理矢理引っ張り込む。まだ、覚悟は決まらない。

「いっちゃん、見てみろよ。あれが神人だ。知ってるかもしれないが。」

神人は今さっき見たように、また破壊活動をしていた。赤い玉が浮いている。

しかし、俺の存在に気付いたのか、またこちらを向いて活動を停止した。不意に訪れる静寂に耳が痛くなる。

「行ってこいよ。一匹倒したらきつと後は楽になる。幸い、活動休止中みたいだし。今逃げたって、いつかまたやってくる。お前は、今のままでいいと思ってるのか？」

古泉は聡い。俺の拙い説得で、持ち直してくれる事を期待するしかない。俺にこれ以上は出来ない。これ以上、言える事は無い。愚か者だから。

ゆるゆると、赤い光が古泉の周りに放たれたかと思うと一気に加速した。神人に向かって一直線、突き抜ける赤の残滓がキラキラと光っている、生命の色。神人をまっぴたつに割る。あっけなく、閉鎖空間は崩壊して行った。

「ありがとう。」

古泉は言った。

「いや、結局お前の決めた事だ。」

「俺のやりたい事ってさ、世界に影響を及ぼすようなことやってみたかったんだ。でも、ちまちま勉強して何の為になるって思ってた。だから、お前に相談した。何の為になるかなんて、個々に見解が違うのにも関わらずな。それによく考えたら、神人を狩るのは世界に影響をもたらしているのかもな。誰も知らなくても。」

タクシーは俺の養護施設の前でとまった。

「じゃあな、また会おう。」

「ああ、また。」

森さんもちちらを見た。

今度こそ、本当の別れの挨拶だった。

古泉とはこの後連絡を取るのが難しくなり、  
実際に再会するのは、三年後の北高だった。

菓子袋を古泉の部屋に置いてきてしまった事に気付いたのは施設に  
戻った後だった。

## 異世界人の邂逅（前書き）

- 5. 28 誤字修正 一部文章修正および加筆
- 5. 29 誤字修正

## 異世界人の邂逅

俺は日常に回帰した。

中学での涼宮ハルヒの行動はしばらく鳴りを潜めていたし、俺がどこにいても、巻き込まれるという形以外で非日常に接触する事はないのだ。

梅雨前線が南からやってきた陽気に押しやられ、本格的に夏が到来してきた頃とうとう七夕がやってきた。雲一つ無い、快晴だ。絶好のメッセージ発信日和だろう。

やってきたと言っても、東中に来ただけで選択できているのなら何もする事は無いのだろう。しかし、そうは問屋が卸さなかった。

「おつかれさまでーす。」

バイトを終え、家路につく。歩いてここから施設までそう遠くはない。

今日もよく働いた、と自己満足にふけりながらぼんやりと歩く。図書室で借りた大量の本が入った鞆が重い。もう少し借りる冊数を減らせば良かったかなと反省していると、

「よお。」

怪しい男が話しかけてきた。暗くてよく見えない。しかも何かフレンドリーだ。知り合いか？

「なんででしょうか。」

距離を取りつつ返事をする。空耳だったら嫌だな。

「いや、怪しい者じゃないんだ。ちょっと、東中までの道を探ねたくてな。出来れば、案内してほしいんだが・・・」

七夕、東中。

・・・もしかしてあなた、キョン君ですか？

「嫌だと言ったらどうします？」

「嫌でも頼むよ。お前に聞けって言われたんだ。」

怪しい事言ってるって自覚ないのかな？てか、誰に言われた。朝比奈さんか？

仕方ない。

「こっちです。」

俺は歩き始めた。施設と逆方向に。

光のある場所を選んで歩くと、はっきりと顔が確認できた。北高生。女子高生？朝比奈さんを背負っている、間違はなくキョン君だ。

「怪しくないって言ってましたけど、女子高生背負ってる時点で、相当怪しいですよ？」

「できればあまり光の無い道を選んでほしかったんだが・・・まあいい。ちよっとした訳があつてな。この人は突発性眠り病にかかっている俺の姉ちゃんだ。本当に不審者じゃないんだぞ。」

「何も知らない人から、変態とか誘拐犯とか言われてもしりませんよ。」

一旦ここで会話が途切れる。足取りは緩やかだが、確実に東中に近づいている。キョン君は突然、

「なあ、北高に行かないか？」

と、切り出した。

「へ？」

いきなりなんだ。言われなくても、そうする予定だ。

「柳は頭が良いからどこの学校にでも行けるだろうさ。しかしだな、北高でしか楽しめない事っていうのが起こるんだ。俺は、お前に北高に来てもらいたい。今は中学生のガキでも、いるのといないのじやあ大違いだ。」

「はあ。」

勧誘。これが選択か。ずいぶんとわかりやすい。どことなくけなされてる気がするが。

「言われなくても、北高に行く予定ですよ。学費の安いところに行きたいですし、近場で言うところ県立か市立になりますからね。」

そっちに関わるってのは既に決めた事なんだ。こう答えるしかあるまい。

「そうか、よかった。」

この会話の流れからするに、未来の俺はSOS団に入っていると思われる。

「俺、高校生活楽しめますかねえ。」

「ああ。」

東中が見えてきた。あそこに居るのは涼宮ハルヒか。  
楽しい高校生活、か。

「じゃあ、俺はこの辺で。」

「ああ、ありがとな、と。ちょっとまってろ、渡す物がある。」  
そう言って差し出されたのは一枚の短冊だった。

「大事に持ってるよ。きっとお前に必要になる。じゃあな。」  
キョン君は去って行った。

まったく、ここから施設までってかなり距離あるんだぞ。

俺は逆方向に歩き出す。笹の葉のラプソディを聞きながら。

三分くらい歩いて足を止めた。

何が悲しくて、重い荷物を背負って、しかも遠回りして帰らなければならなかったんだ。

蛍光灯の下で手に持った短冊を見る。

かっちりとした明朝体で、

「かささぎの わたせるはしに おくしもの しろきをみれば よ  
ぞふけにける」

七夕がらみだが、これは冬の句じゃないか？

文字の後ろには奇怪な、それでいて芸術的な紋様がえがかれていた。  
「ねえ、あんた。」



「うわっ！」

まじで驚いた。短冊を挟んで、目と鼻がくつつくかと思うぐらいの至近距離にえらい美人が居たのだ。

「あんた、東中の近くで女子高生背負った北高生といっしょにいたでしょ？」

「ああ。」

えらい美人、もとい、涼宮ハルヒは俺に尋ねた。

「あいつ、名前とか言ってた？ 本名よ！」

「いや。言ってなかった。」

見るからに怪しかったわよね、などとブツブツ独り言を言っている。無事、ジョン・スミス氏と出会ったらしい。

「そう、あんたの名前は？」

「松原柳。お前と同じ中学だ。」

上から目線のずかずかとした物言いに気圧される。

「柳ね。わかったわ、帰る。」

ふい、と俺に背をむけて歩き出すのを見て俺は立ち上がった。キョン君ならここで、やれやれとでも言うのだろうか？ はあ、とため息をつき。

「遅いから、送って行く。夜道は危ないし。方向的に途中までは同じだろうからな。」

「いいわ。あんたに今さっきの北高生のこと聞িয়েおきたいから。」

そうやって、歩き出したのは良いがこちらから話の切り出しにくさと言ったら、泣けてくる。坂道に差し掛かると、荷物の重さと、ハルヒの速い歩調に会わせるのが精一杯で話す気など失せてしまった。ハルヒはなかなか話を切り出さない。

「おい！」

なんだなんだ。今日はよくしゃべりかけられる日だな。

ハルヒと俺が振り返ると、そいつは叫んだ。

「世界を大いに盛り上げるためのジョン・スミスをよろしく！」

## 異世界人の邂逅（後書き）

難産でした。

前回と今回はいつか書き直したいです。

## 異世界人の嘆息

「ねえ、あんたもさ、」

ハルヒが切り出した。

「何だ？」

「宇宙人とか、未来人とか、超能力者っているとおもおう？」

ジョン氏にぶつけたであろう質問が俺にも浴びせられる。

「いるんじゃないの。」って答えたかった。

一番ぼかしやすい解答で、尚かつハルヒの希望を失わずにすむからだ。

ただ、俺はその台詞を言ってはいけない。

「いたらいのにな。」

だから、そんな返事をした。

超能力者の友人がいるんだけどな。白々しい。

「どうしてそう思うのよ？」

どうして、か。

俺がキョン君だったら、宇宙人およびその他諸々から証拠品を押収してハルヒに洗いざらい話してしまうに違いない。めんどくさいのだ。

嘘をつき続けるのはかなり大変だとおもうのだが、よくそんな事を一年も続けられるよな、彼らは。しかし、だ。

「だって、そっちの方が面白いじゃないか。」

ハルヒはハッとした表情でしげしげと俺を見つめてきた。

あ、ヤバイ。言ってから気付いた。

これハルヒの台詞だ。

しかし、心配は無用だったようだ。

そうね、そうよね、とつぶやくとガバツとこちらを向き、100ワツトの笑みで、

「あんた、よくわかってるじゃないの！」

とのたまった。バンバンと叩かれた背中が痛い。しかも、

「じゃあ、明日ね！」

それだけ言うと、大きめの一軒家に入って行った。彼女の家か。

しかし、まあ、驚いた。

中学生のハルヒは三年間一度も笑みを浮かべる事無く卒業するのが規定事項だと思っていたし、学校から施設への帰り道の途中にハルヒの家があるとは思わなかったからな。

気付かなかった俺も俺だ。

次の日、ハルヒがいつもマジな奴って言う事をこれでもかって言う程、思い知った。

結局、昨日は施設に帰るのがものすごく遅くなってしまった。

施設長さんからはこれでもかって言うぐらい起こられるし、散々だ。

結局、反省文を二枚書く事で落ち着いたが・・・まったくだ。

グラウンドに現れたナスカの地上絵みたいなのに、全校生徒が大騒ぎしているのを横目に見ながら教室に入ると、

涼宮ハルヒが俺の席に座ってた。

「おそいじゃない！柳！」

自分の席に荷物を置く。今日は軽いぞ。

「へえ、あんたそんな顔してるんだ・・・昨日は暗がりだったからよく見えなかったけど、男子にあるまじき美人さね！なんで、女の子じゃなかったのかしら・・・」

どこぞの谷口みたいな事を言っただけやがる。

「まあ、いいわ！」

ハルヒは俺の耳元に顔を寄せて小声でささやいた。

首元に吐息がかかるのがなんともくすぐったい。

「昨日の、ジョン・スミスの事は誰にも話さないでちょうだい。」

割とその声が真剣だったのを覚えている。

再び俺に向かい合うと、

「それと、今日の帰りは私につきあいなさい！じゃあね！」

とだけ宣言して嵐のようにさっさと行っただけ。

くそう、キョン君がくるまでの間俺が引っぱられ回されるフラグが立ってしまったのか！

あの涼宮が笑顔だ・・・クラス内にざわめきが広がった。

「おい！柳ー！おまえ、何したんだ！」

圭介が乗り込んでくる。ついでに谷口も。

クラスメイトは俺を珍しい者でも見るような目で見ていた。

俺が一体何をした。

「おいおい、いつのまに涼宮とくっついたんだ。」

そういう事か。

「くっついてなんか、いません！」

「しかし、今さっきの耳元に顔寄せてたのってなんだかそういう風に見えたよー。いっぱい人見てたからきつとそうだった噂すぐに立

「っちゃうだろうねー。」

「だから、違うって。」

「しかし、お前の女の好みはわけわからんなあ。お前も涼宮と同類になっちゃったのか・・・お前らがやったんだろ？校庭の落書き。深夜デートか。うらやましいぜ！」

「違う！ただ、昨日の晩のバイト帰りに涼宮とぼったり会って、話をしただけだ。それに、俺は落書きはしてない！」

「ぼったり、以外嘘じゃない。」

「昨日の晩に涼宮と会ったってことは、これの犯人は涼宮なんだな。全くだぜ。まあ、名実共にお前は有名人の仲間入りだ。覚悟しとけよ？」

「柳も大変だねー。」

谷口はせらせらと笑い、圭介はのんきそうな笑みを浮かべる。

「まったくだ。」

俺の中学生生活に安寧はなくなつたな。

**異世界人の思惑（前書き）**

5. 30 一部文章修正



## 異世界人の思惑

放課後。

校庭落書き事件は涼宮ハルヒ一人で行われた事であるという嘘はすでに校内に広まっていたが、

その涼宮ハルヒに『気に入られた』とされる俺は一日中奇異の目にさらされる事になった。

タイミングが悪かったとしか言いようが無い。

あいつがこんな派手な事件を起こした翌日に『気に入られた』人物なのだ。

おまけに今朝の出来事のおかげで、尾ひれどころか背びれとかしっぽとか余計な物がたくさんくっついた状態での噂である。

圭介と谷口が言った、

「あの二人が付き合い始めた。」は、まあ、一番迷惑だが思春期の奴らにはどうしようもないから放っておく事として、

「松原も頭のネジが飛んだらしい。」とか「柳は美人ばかりにフラグをたてまくる面食いだ」とか不名誉かつ、不愉快で、訳の分からん噂は今すぐ消え去ってもらいたい。全てナシにできるなら俺は性格重視だ！と校庭の真ん中で叫んでもっても良い。

結局、こいつらもどうしようもないのだが・・・

今後、どうしょ。

解決策その一。

ハルヒを無視する。適当に理由つけて。

・・・却下だ。

そんなこととして閉鎖空間が増えたら古泉とかが怪我するかもしれない。それに、心証が悪かったら原作から一步遠のく立場になってしまう。

それではこの世界を楽しめまい。

解決策その二。

尾ひれ背びれをただして回る。

かなり骨が折れそうだ。

というか、噂は独り歩きする物であり、当人が干渉したところでどうしようもないもんなあ。むしろ・・・煽る結果になるか。却下だな。

解決策その三。

ハルヒに付き合う。

まったく・・・これしかあるまい。

という訳で、俺は涼宮ハルヒを待っている訳だが、校庭落書き事件のせいで校長室に呼び出されているあいつはいくら待てども来ない。既に二時間以上待っているのだが。

その待ち時間で適当に昨日の反省文を書き上げ、さらに宿題まで終わらせてしまった。暇で暇でしょうがない。今日がバイトの無い日でよかった。

ゆっくりと進む時間の中で俺は今までの事についてまとめてみる事にした。

涼宮ハルヒは俺への干渉ができない。

俺の干渉遮断能力？？便宜上こう呼ぶ事にする？？は神様とか宇宙人にはけっこう有効かもしれないが、未来人、超能力者、一般人には何の効果もない。

ナイフで刺されれば普通に死ぬだろうし、てか、命を狙われたらもはや生き残れまい。

機関とか特に怖い。

そこでふと、ひらめく。

俺に干渉できなくとも。異世界人という概念には干渉できるのではないか？

もし、ハルヒが「異世界人は全員魔法使い！」とか「異世界人は全員不死身！」でも思い込んでくれたら俺はこの世界で生きて行く力を一つ身につける事が出来るはずだ。

ああ、それいいな。

悪い方向に取られなければいいが、かなり優位になるに違いない。既刊の分まではみんな幸せそうなので、当面の俺の目的は原作の保持という事になるだろう。

こっちの世界でそこそこ楽しむ為には俺が死なない事は大前提だ！

しかし、どうやって思い込ませるか・・・だな。

そんなわけで、俺の「何かチートください計画」は幕を開けたのだった。

## 異世界人の不測（前書き）

6. 1 加筆修正 タイトル変更

## 異世界人の不測

廊下をパタパタと駆ける音が聞こえる。

「ごめん！まった！？」

そうやって、俺の思索時間にようやく闖入者が現れた。  
言わずと知れた、涼宮ハルヒである。

「ああ、まあやる事あったし良いよ。」

「こういうときは全然待ってないってぐらい言いなさいよ！」  
いや、二時間も待たされたらそれ言えないって。

「悪い。」

「まったく、あの教師どもやかましいったらありやしないわ！こっちはとっとと探索に行きたいって言うのに！」

「探索？」

「ええ。」

ハルヒの口角があがる。こいつが口角をあげると悪い事を企んでい  
るとしか見えないのは俺だけか？悪代官に金一封手渡す越後屋のよ  
うだ。

「ジョン・スミスを探すのよ！」

東中からようやく出て家路につく。

オレンジ色と水色の混じった空には雲一つ無い。

「よく考えたら、宇宙人とか以前にあいつが一番怪しいのよね。ま  
るで宇宙人とかと知り合いのように話してたんだから！」

こいつの語尾にはエクスクラメーションマークがつくのがデフォル  
トなのか、ただ気分が高揚しているだけなのか。

「と、いうわけで。北高の前で待ち伏せしようと思ったんだけどこの時間じゃ、今日は無理ね。明日からは張り付くわよ！もちろん、柳もね！」

「ちよっと待て、明日俺はバイトだぞ！」

「バイトって言ってもきつと六時くらいからでしょ？それまでいいわ。」

ちなみに今はテスト週間なので、部活は無い。通常時もあまり参加していないが。

あ、そうだ。

「わかった。てか、ジョンは宇宙人だと知り合いつぽいんだろ？なんでそんなのわかったんだ？」

「宇宙人と未来人と超能力者が居ると思う？って聞いたのよ。そして『いるんじゃないの』って答えたの。しかもね、異世界人は居るか？って聞いたなら『まだ知り合ってない』って答えたのよ！」

「それは・・・」

高校一年の七月七日時点で俺が異世界人だということをまだ誰にも言っていないらしい。

当然と言えば、当然か？

「ね、不思議じゃない？」

ハルヒの瞳はキラキラと輝いている。一番星を見つけた幼子のようにだ。

そして、ここまで影響を無意識で与えるキョン君も？いや、ジョン・スミスは流石だな。どれくらいすごいかなと言えば、台風を消し去るくらいすごい。

「まずは、本名を調べないとな。」

「ええ！」

ところで、彼の本名は永遠の謎なのか？

で、まあ来たる翌日の放課後。

圭介と谷口とその他大勢にじろじろと見られながらハルヒと北高へ向かった。

噂が当分消えることはなさそうだ。

昨日のハルヒの宣言通り、北高へ向かう。

ハイキングコースを気乗りしないまま足を動かす。

行っても、ジョン・スミスはまだこの学校に在籍していないのだ。

しかし、原作通りに進めるには仕方あるまい。俺自身は行く必要は無いのだが、ハルヒの前の憂鬱ぶりを知っているからな。不機嫌オーラを感じ取れる俺にとってはなかなかストレスになるのだ。

それに七夕以降、肩こりが一気に減った。原因は、ハルヒが元気になったからだろう。空気も晴れやかである。

俺にとって一番何が良いか？

それはハルヒと一緒に不思議探索を楽しむのが一番良いのである。

「なんでみつからないのよ！」

テスト週間が終了し、テストが始まった頃にハルヒの不機嫌は復活した。以前よりはかなりマシだ。一時的なものだろう。

「張り込みだっけしたし、北高の生徒全員調べ上げたわ！なのになんで居ないわけ！？」

激昂、という言葉が一番ふさわしいだろうか。ハルヒは教室の黒板を見つめる。乱雑な消され方をされていて、とても綺麗じゃない。

「今日はもう、帰る。また明日あいましょ。」

ああ、あれが「ついてくんな！」って背中か。

大統領になる人間は身にまとうオーラさえ一般人と違う。というのを聞いた事があるが、ハルヒのオーラもまた、一般人のそれと異なる

っていた。

あつい夏が過ぎ去った。

十一月の下旬、ハルヒの提案で北高祭にも潜り込んだ。

「まったく、どこにいるのかしら・・・」

校門前までたどり着くまでの間、ハルヒはまさに不審者だった。キョロキョロするのは、まあ仕方ないとしてもわざわざジグザグに歩く必要は無いだろう。

「折角だから、楽しもう。」

「そうね、私と似たような事してる人もいるかもしれないし。」

しかし、県立の一高校。

ハルヒの突拍子も無い考えについて来れる訳がない。

「なによ！全然普通じゃない！」

ハルヒさん、その怒りのオーラやめてください。俺の胃に穴があく。中庭まで出て、パンフレットから顔を上げると部室棟を眺めていると、窓辺からせわしなく動き回る北高生が視界に入った。

「っ！」

非常にまずい。このタイミングでこれは無いだろう。

「なあ、ハルヒ。手分けして探さないか？」

「別に良いわよ。」

「じゃあ、俺あっち見て回るから向こう側よろしく。」



軽くうなずき、ハルヒが向こうに歩き出すと、俺は部室棟に走る。  
入れ違いになるなよ!

呼吸をする事も忘れ、階段を二段飛ばしで駆け上がる。  
バンと扉を開けると、やはりそこには文芸部の本を漁るジョン・スミスがいた。

「っ!・・・柳か?って、しまった!」

「なにが『しまった』なんだ?」

ジョン、いやキョン君はバツの悪そうに視線をずらし、本棚から離れ、一步後ろに下がる。

「お前、俺が誰だかわかるか?」

「ジョン・スミス」

即答する。悩むのもばかばかしい質問だ。

「もしかして、お前は俺を捜してたのか?」

「いくら探しても見つからないと思ってた。ハルヒの誘いに乗って北高祭に来たけど、なんであんたはここにいるんだ?」

複雑な感情を押し殺して言う。

まだハルヒに見つけられたらダメだろう!心の中で叫ぶ。大切な物が壊されそうな感覚に、熱い嵐が俺の中で荒れ狂った。

「・・・北高生だからだ。」

「嘘だ。ハルヒと俺はこの四ヶ月お前の事を探し続けてたし、北高生を調べ上げたがお前みたいな奴はいなかった!それに・・・何故お前は俺の名前を知っていた?俺はお前に名乗っていない。」

こんなところで、ハルヒがジョンをみつける事があってたまるか。

「・・・それは。」

「それは、私が説明します。」

突然後ろから掛けられた声に振り向く。

大変美しいOL風の服を着た、朝比奈さん(大)が微笑みを浮かべて立っていた。

文芸部室のがたつくパイプ椅子にそれぞれが腰を落ち着けると朝比奈さんが切り出した。

「信じられないかもしれないけど、聞いてください。」

キヨン君と朝比奈さんがアイコンタクトを取る。

「私たちは、未来から来ました。」

そりゃそーだ。

「いつから来たのかは言えません。でも、そのうちわかんと思えます。キヨン君と私は未来のあなたと友達だから。あなたの名前を知っているのもそういう訳なんです。未来関係の事は、またいずれ私から聞いてください。」

「その話が本当だとして、なんでそんな事おれに話すんですか？」  
ボロを出さないように神経を張りつめる。この人も、森さんと同様に気が抜けない。

「ふふっ。」

大層愛らしい笑みを浮かべる。そんな顔したって、だまされないぞ。

「ごめんなさい。私の知ってる柳君とちよつと違ったから・・・」

「そうね・・・これは規定事項なの。これ以上はちよつと今の時点では言えないわ。ごめんなさい。」

「未来人にはいろいろ規則が多いんですね。」

俺がそういうと、部室には沈黙が広がる。

「まあ、信じますよ。そうじゃないと、ジョンの事が説明つかないですし。」

「そういつてくれると思ってました。」

綺麗な笑みを貼付けた顔をキヨン君の方へ向けると、話が終わって良かった、という風に立ち上がる。

それに続いて立ち上がる俺に、キヨン君が口を開く。

「お前、意外と驚かないんだな。俺は最初信じられなかったぞ。」  
知っているから、とは言えまい。

「あいにく、超能力者の友人がいるので。」

彼はポカンと間拔けな顔をして、そうだったなとつぶやいた。

「じゃあ、俺は行きますね。」

「信じてくれて、ありがとう。あと、涼宮さんには彼に会った事言わないでくださいね。これも重要な規定事項なんです。」

「わかりました。じゃあ、また。」

俺にとっても重要な規定事項だからな。

俺はふらふらと部室棟から出るとハルヒを探す為に、走り出した。

そうして秋は終わりを告げ、冬がやってきた。

## 異世界人の問掛（前書き）

6.  
1 加筆修正

## 異世界人の問掛

冬が迎える頃には、ジョン探しは落ち着きを見せ始め、その頃には既に俺とハルヒは登下校を共にするようになり、その時間は決まって不思議談義に費やした。

閉鎖空間の発生率は中学入学当初と比べて明らかに減ったし、ハルヒも俺も不思議を探す時間を大いに楽しんでいた。

例えば夏休みの頃、

その頃はまだジョン探しをあきらめてはいなかったが、夏祭りに行つてゲームを競ったり、蟬取ったり。SOS団サマースペシャルシリーズの簡略版みたいなのをやったし、新学期が始まって休みの度につれ回されたりした。

そうして、ハルヒの中での俺のカテゴリは親友にランクアップしていたのだ。

「お前と涼宮が付き合ってるなんて、もう誰も言わないぜ。」  
谷口が言う。

「そうだねー。涼宮さんはきっと頼れる人が欲しかったんだよー。だから、周りから見ても涼宮さんが柳に甘えてるって言う風に見えるんだ。恋人っていうよりは父子って雰囲気だよねー。」

独特の口調で圭介もこういう始めた頃には俺もハルヒも一部を除けば、ごく普通の中学生生活を楽しみ始めていたのだ。

しかし、これで良いのだろうか？

俺は涼宮ハルヒの『鍵』ではないのだ。

もしこのまま中学生生活を楽しく過ごしてしまったら、明るいハルヒが北高に入学する事になる。ハルヒは入学するときには憂鬱でなければいけないのだ。タイトルになってる、『憂鬱』だ。どうすればいい。

原作が俺の手によって破壊されようとしているぞ？

それでもいいじゃないか。って？

ハルヒはジョンといっしょにいた人物として俺に興味を持ったのであって、結局俺は『鍵』の付属品、いわば目印代わりのストラップでしかないのだ。

「やらないで後悔するより、やって後悔した方がいい。よな。」

単純な大博打に出る事にした。

吐き出した息の白さが羨ましくなった。

「何かチート下さい計画」はまだ実行されていなかった。いくら考えても良い作戦など思いつかなかったのだ。だからこそその博打だ。ハルヒがとんでもない事を言ったら即アウト、というか原作が本質的に変わる。

その場任せな作戦なのだ。作戦とすら呼べないだろう。

「なあ、ハルヒ。宇宙人とか未来人とかにどういうイメージ持って

るんだ？」

「何よ、突然ね。そうね、まず宇宙人はとっても強いに違いないわ！」

「強い？」

確かに強いさ。未来人と超能力者に比べたら断然な。

「だって、地球人は2000年も歴史を描き続けてきたのに、宇宙人の一人も発見できてないのよ？ だけど、宇宙人が地球人を発見したって事は、向こうの方が技術的に上じゃない？」

ああ、そうだよ。そして、宇宙人が描き続けてきた歴史はたしかビツクバンあたりまで遡るはずだ。

「じゃあ、未来人は？」

「そうねえ、自分の知ってる過去と違えば驚いたりしてるんじゃないかしら。」

とっさに禁則事項です、という朝比奈さんを想像する。

「超能力者は？」

「どんな能力持ってるかってこと？」

「そうだ。」

「うーん、ナントカ玉！みたいな感じよ、きつと！派手な方が良いけど、いくら探しても見つからないんじゃないじゃ意外と地味なのかもしれないわね。」

ハルヒの眉根が寄る。不思議が発見されない事への不満が高まったのか少し空気にとげが混ざる。

でも、そうか。元々こいつの呼び出した宇宙人その他もろもろなんだ。

そもそも、こいつの中である程度イメージが無いと形が作られない。

じゃあ、博打になるのは次の台詞だけだ。

俺は一番気になるこの台詞を出来るだけ丁寧に掲げかける。

「じゃあ、異世界人はどうなんだ？」

「そうねえ・・・」

なんとなく、言われる事を恐れるような、待ち遠しいような感情に襲われてやたらと時間が長く感じたが、ハルヒは逡巡していたのは一瞬だっただろう。

「うーん、異世界人といっても、同じ人だから言われないとわかんないかもしれないわね。」

異世界人に対する認識は、前者三つと比べてかなり常識的だ。

異世界人という概念はこいつの中で形作られるのを待つ粘土のように、放置されているのだろう。

「テクノロジーが進んでるとか、テレポートできるとかじゃないのか？」

「言われてみればそれが近いかもしれないわ。たしかに、世界を渡れるんだから、空間に関係しているのかもね！」

空間関係の能力、こいつが思うのなら俺にその能力が芽生えるのか、干渉遮断能力によって俺のもくろみが崩れ去るのかはすぐく曖昧なところだが、

「なあ、そんな異世界人って居ると思うか？」

ハルヒは鳩が豆鉄砲を食らったような状態になり、興奮したような、怒ったような調子で

「何今更言ってるのよ！そっちの方が面白っていったのは柳だったじゃない！」

俺は柄にも無くははっと乾いた笑みを浮かべてしまった。

暖かい空気が流れ込んでくるような感覚だ。

「そうだったよな、じゃあ、その異世界人は畑違いの超能力者みたいなもんなのか？」

「そんなかんじ！でもって、こっちの超能力者とドンパチやってた



「らおもしろいかもね！」  
純粹なハルヒの笑みは斜陽に溶け込んだ。

## 異世界人の感知（前書き）

五月三十一日にupしました、

「異世界人の沈黙」と「異世界人の問掛」を六月一日に加筆修正しました。

少々の加筆程度ならばその話の前書きでお知らせしているのですが、今回の修正は

「異世界人の沈黙」が「異世界人の不測」とタイトルを変更する程度に

話の流れが変わってしまった部分があるので、  
既にご覧になられた方にももう一度読んでいただけると幸いです。

## 異世界人の感知

バイトの後、外灯だけが寒々と光る薄暗い帰り道を歩いていると、つけられていることに気付いた。

ハルヒとの会話の次の日。

一年でもっとも冷え込みが激しく、霜が辺り一面真っ白にしている頃に、俺は超能力もどきの能力に目覚めた。

空間把握能力？？とでも言えば良いだろうか。

念じれば、例えば目をつむっていても本が読めたり、誰がどこに居て何をしているかがわかる。遮蔽物も当然無視できる。

「見える」というよりは「わかる」と言っただ方が適切だろう。

これだけ聞けば千里眼のように聞こえる。

そして、地味だ。

これだけで非日常と渡り合えと言われても、どこの無理ゲーかといちゃもんをつけたくなる気持ちはきつと皆さんも理解してくれるだろう。

それでも慣れるために最近はずっと能力を使用し続けている。

徐々に把握するスピードが上がってきたし、死角も無くなった。

だから、つけられていると気付けたのだ。

追跡者は典型的な黒いスーツを着込んだ恰幅の良い男で、胸ポケットからサングラスをぶら下げている。暗い夜道では視界を悪くするからだろう。

動きは非常に慎重で、約20メートルの距離を保ってついてくる。

さて、どうするか。

そもそも何故俺はつけられているんだ？能力は視認できる物ではないし、異世界人設定も神様パワーで隠蔽されているはずだ。

理由が明確にならず、考えが堂々巡りし始めたので一旦気持ちを切り替えるために近くのコンビニに立ち寄る事にした。人の居るところならあちらかも近づきにくいだろう。施設にまでついて来られてはまずい。ここで相手が引かなかった場合の事を、コンビニの中で考えよう。

明るい店内に目が順応する瞬間にめまいを覚えながら雑誌コーナーに向かう。

適当に本を抜き取って開きながら、今一度状況を確認する。

男はこちらから死角になる位置で立ち止まって携帯で電話し始めた。車か、仲間を読んでいるのかもしれない。

そんな考えが浮かび、周囲に警戒をめぐらす。

俺の一番近くに居るのは、コンビニの店員。

そして、その店員は棚から隠れるようにして、

??俺に銃口を向けていた。

## 異世界人の危機（前書き）

6.  
7 加筆修正

## 異世界人の危機

驚愕のあまりにバツと振り返ると、銃声が店内に洩した。

ああ、銃弾がスローモーションのように見える。

頭が回って回って、止まらない、止められない、死にたくない。

脳が大量のアドレナリンを放出する感覚、脳そのものが熱い、痛い。目の前が真っ暗になったかと思うと、急に五感が氷の冷たさのように研ぎすまされ、俺は弾丸の動きを理解した。

左側に一歩ずれる最小限の動きで銃弾をかわす。

怖くて足は震えっぱなしなのに、やはり頭だけは冬の朝の空気のように冴え渡っている。

五メートルの位置に、襲撃犯。もう一度俺に銃を構える。

店の奥にあと三人店員がいる。一人のポケットには銃が入っている。ドア付近にさっきの追跡者が。真っ直ぐに俺を狙う。

黒いタクシーが一台、時速100キロを超える速さでこちらに向かっている。

膨大な情報が流れ込み続ける。強烈なめまいがする。

暗くなったかと思えば明るくなり、様々な色が混じりあう不思議な世界。

永遠のような一瞬に苛まれたかと思うと、終わりの突然で、世の中の全ての動きを理解する。

続いて放たれた前後からの銃弾をそれぞれ一つの動きで避けると、生存本能のままに店員に全力のアップアを決める。

陳列棚に叩き付けられる店員を無感情に見下ろし、銃を奪い追跡者を撃つと大腿に命中した。そのまま膝を折ったかと思うと、だらりと倒れ伏すところを見ると銃が普通の銃ではなく、麻酔銃であった事に気付いた。

俺を殺すのではなく、捕獲することが目的？

一体何故、という思考は俺の中の恐怖を呼びもどしつつあったのだが、脇腹に走るの痛烈な痛みにかき消された。

グラグラする意識の中で認識する。奥にいた三人が俺の止まったところを狙って襲ってきた事を。一人のもつ銃が麻酔銃ではなく、普通の銃である事を。俺の腹を穿ったのは金属バットだ。あばらが折れたんじゃないか、そう思う程痛い。

どうにか後ろに振り向きながら銃を撃ったと思ったのだが、発砲する事は無くカチャリという玉切れの音が空しく響く。

ああ、来る。

迫る二つのバットをなんとか避けるが、続くパンチは避けきれず横腹に当たり、ふわっと浮いたかと思うと、重力にしたがって陳列棚に叩き付けられた。

もう、むりか？

そう思ったとき、黒塗りのタクシーがコンビニに突っ込んできた。二人の店員を跳ね飛ばすと中から女性が出てきた・・・森さん。

回る視界に堪えきれず、目を閉じる。

銃を持った男が森さんに発砲しようとするが、それよりも速くスタンガン突きつけられ気絶した。

「大丈夫ですか？」

もう、身体を動かせない。口の中は血の味がする。

「おそくなって申し訳ありません。すぐに逃げましょう。」  
俺は車に運び込まれた。

動かされるとき、全身が軋むような痛みに悩まされたが、そんな事を言ってる場合じゃないというのは理解していた。



## 超能力者の事情（前書き）

### 6. 4 誤字修正

## 超能力者の事情

車は瓦礫から這い出すと勢い良く発進した。

それと同時にワゴン車が後ろから追いかけてくる。

閑静な住宅地から飛び出し、車の疎らな道をハリウッド映画のカーチェイスのようにして駆け回る。

120キロオーバーで走っているにも関わらずぴったりとくつついてくる車に焦りと苛立ちが募る。

「荒川、西に行きましょう。相手も中々のようです。」

この人達に任せておいても大丈夫だ??むしろこの人達しか頼れない??という安心感に能力の使用を止めると、蒙昧としていた意識がいくらかマシになる。

狙われていたのが俺だという確信を、腹部の痛みが如実に物語る。

「森さん、何が起こったんですか？」

俺が聞くと、森さんは後方を確認しながら淡々と、

「あなたは超能力者の大多数から狙われています。」

と断言した。

狙われているのは嫌でもわかるのだが、何故超能力者から狙われなければならないんだ。心当たりは思い浮かばない。

「あなたと古泉が会った後から超能力者による組織作りが行われました。主に涼宮ハルヒの監視や神人の退治が目的です。世間の有力者から資金を募り、超能力者以外の一般人を構成員に含めた巨大な

機関になりました。」

あのかきはまだ機関は出来ていなかったのか。

「当初は世界の現状維持を目的とする事で一致していたのですが、中には涼宮ハルヒの謎を無理矢理解き明かそうとする強硬派が台頭し始めたのです。」

原作と違う？

たしか、原作は現状維持が主流派で、強硬派はごくわずかだったはずだ。

非常にまずいな。

「なぜハルヒではなく俺を狙うんですか？」

「閉鎖空間で起きた事を覚えているでしょうか？」

神人の動きが止まったアレか。

俺の方を見るとぱったりと活動を停止してしまった神人。

「あなたは一体何者なのか。神に手を出す前にあなたを調べる方向で話が進んでるようなのです。普段なら保守派が牽制しているのですが。巻き込んでしまつてすみません。」

保守派？？現状維持派が強硬派を抑えきれなくなった。ということか？

「何かあったのですか？」

「機関の事実上のトップが留守にしているのです。」

なるほどな。

「古泉はこのことを・・・？」

「知りません。」

即答された。

車がキキイという音を立て急停止した。そのまままた走り出す。何があったのかと、俺はあわてて能力を使用する。

後方150メートルに先のワゴン車が。三人が乗っているが、武器はスタンガン一つだけ。前方600メートル先にもワゴン車が。四人とも麻酔銃を携えている。

「車が正面衝突したらすぐに降りてください。私たちはそこで足止めします。」

「ですが！」

「少し行ったところに渡瀬さんの家があるはずです。茶色の瓦の洋風な家なのですぐにわかると思います。渡瀬さんに理由を説明してください。すぐに追いつきますから。」

森さんはそれだけ告げると衝撃に備えた。

あと、3、2、1。前方に吹き飛ばされそうになるが身体にシートベルトが食い込むことで抑えられる。

すぐにシートベルトを外し、外に飛び出す。

向こうの奴らはまだ出てきていない。

いまだ。

能力を最大限に引き出す。敵に捕まらない、最短ルートを割り出し、走る。

やはり最小限の動きで銃弾をかわすと、また、あのめまいに襲われるが気力でどうにかする。ここを切り抜けなければ・・・

争いの音が遠くなり、400メートルほど走ったところで、もう、だめだ。頭が痛い。立ち止まる。

くそ。

渡瀬さんの家を割り出すと、能力の使用を止める。

あと100メートル。たかが100メートル。されど100メートル。

一般的な男子中学生が全力で走ってほしい13秒の距離。

走れば良いのだが、もうクタクタでひどいめまいがする・・・

脇腹の痛みが痛いを通り越して、頭痛に変わる。

もう、どうでもよくなってきた。

## 異世界人の自責

もうやだ。

なんでこんな痛い目にあわないといけないんだ。

全部、ハルヒが原因だ。

黒い感情が心の奥深いところから溢れてくる。

冬の冷たい空気は、走った事で熱くなった肺に容赦なく突き刺さる。

目頭が熱くなって、ふとハルヒの笑顔が心をよぎった。  
待て、あいつは何も知らないんだ。

ただ無邪気に不思議な物を信じてるだけのやつなんだ。

それにこれは俺の責任だろ？

俺が能力が欲しいあまりにハルヒに余計な想像をさせてしまったのが原因と考えられないか？

「超能力者とドンパチやってたらおもしろいかもね！」

なんて、笑えない冗談だ。

結果、主導権が一時的にも強硬派に移り、このザマだ。  
ちくしょう。

責任取ってやる。

上着を脱いで、寒さで身を打つ。のろのろと歩き出す。

もう少しだ。

どうにかして、原作の流れに戻さなければ。

追っ手はまだ追ってきてない。

渡瀬さんの家のインターホンを押す。

「はい。」

低く、渋い、何処か人を落ち着かせるような声が返ってくる。

「松原柳と申します。森さんをご存知でしょうか？彼女にここに行くように言われたのですが・・・」

不審に取られなかっただろうか。

「知りません」の一言でゲームオーバーだよなこれ。

「話は聞してるよ。すぐ開ける。」

よかった。

すぐにドアが開くと中に引っ張り込まれる。

がちゃんと扉が閉まった。

腕を掴む力が強く、動揺する。

「大変だったね。」

渡瀬さんはラフな格好をした40代ぐらいの男性だった。

「いきなりで、これから先どうしたら良いか・・・突然訪問してきてすみません。」

居間に通された。広い。

座って、と言われたので腰を落ち着けると、これまで自分を保っていた気力が一気に抜けるのを感じて思いがけず机に突っ伏してしまふ。

「そのことなんだが、私の養子にならないかい？」

「へ？」

何を言っているのさ。

「そのままの意味だよ。私は機関のスポンサーをやっているんだ。一、二番手を争う出資額じゃないかな？私の息子になれば、強硬派もうちがつに手出しは出来ないだろう。森さんも私と同じ見解だ。」

もともと、その気になれば僕ごと潰してくるだろうけどね、と付け加える。

「それは・・・しかし、迷惑でしょう。潰してくるって・・・」

「強硬派もすぐに私を潰せないさ。それにトップが戻ってきたら、そんなことさせないだろう。」

暖かいお茶が俺の前に置かれる。

一口飲んで初めて喉が渴いていた事に気付いた。

「それだけじゃない。妻が十年前に急逝してね。君さえ良かったら、私の息子になってくれるとうれしい。どうだろう？」



願っても無い提案だ。

俺にも親ができる。

機関の奴らは俺に手をだせなくなる。

でも、それじゃあ、

「お気持ちはとても嬉しいです。」

気持ちを落ち着けてから言った。

「でも、それじゃあ、次はハルヒに危害が及ぶ可能性があるんです。それだけはさせてはいけません。俺の友達ですから。それに、今回ばかりは巻き込む訳にはいかないんです。」

渡瀬さんはきよとした顔になって、

「巻き込まれたのは君の方だろうか？」

逆だ。今回巻き込まれたのはハルヒだ。

火種を巻いてしまったのは俺で、その火の粉がハルヒに飛びかかるうとしている。

「でも、あいつは知っちゃいけないんでしょう？ だったら、俺がなんとかしないと。」

「君は友達思いなんだね。何か、当てはあるのかい？」

全くないな。  
でも、

「今晚だけ、泊めてもらえませんか？お願いします。後はどうにかします。」

渡瀬さんは微笑んだ。

## 異世界人の見解

一晩ぐっすり眠ると頭がすっきりし、昨日の事を落ち着いて検証する事が出来た。

「おはようございます。」

居間では既に渡瀬さんが料理を作っていた。

茶碗一杯の白米、わかめとタマネギのお味噌汁にヨーグルト。  
更にフライパンの上ではとろけるチーズをのせた巨大なオムレツが  
ひっくり返される。

「おはよう。ささ、食べなさい。」

「何から何まですみません・・・いただきます。」

ああ、白米はすばらしい。

口の中にふんわりとした甘みが広がる。

「怪我の方はどうだい？」

「昨日に比べたらだいぶマシです。頭もすっきりしてますし。」

昨日寝る前に湿布を貼ったりと手当もしてくれたのだ。

ダメージを受けていたと言っても、打ち身なのでしばらく放っておけば治るだろう。

「それならよかったんだ。」

そうして、絶品の朝ご飯が食べ終わる頃に森さんがやってきた。昨日と比べて、どこか疲労の色が見える。

「どうするおつもりですか？」

どうして良いかまだ決まっていけないので、何とも言えない。彼女が口火を切ると、渡瀬さんもしげしげと俺を観察する。

「ハルヒと俺の安全の為には強硬派を潰すか、超少数派にするしかないでしょう。といっても、俺一人では無理ですが。機関の敵対勢力とかはないのですか？」

「機関の敵対勢力と手を組んで、潰してもらうという事ですね？」

俺は首を縦に振る。

「残念ながらありません。強硬派に取っては保守派のみですね。この数ヶ月間、内々の事で手一杯でしたから。我々の目的は現状維持が大多数でした。それに、機関外部に敵対勢力の生まれる余地はないでしょう。」

え、なんですか？

「涼宮ハルヒのことを知っているのは機関だけであって、世間一般には知られていないでしょう？」

まで。

機関の人たちは宇宙人や未来人の存在をしらないのか？

「ハルヒを監視しているのは機関だけだと言う事ですか？」

「報告上はそうなっていますが。」

宇宙人。

情報統合思念体。TFEI端末はこの時期には地球上にいるはずだが、あいつらの目的はハルヒの観察であって、こっちに関与してくる事はあまり無い。

未来人。

機関と小康状態に陥るはずのこの組織。

なぜ、小康状態なのか？

この世界が改変されては困る、と言う点で機関と同意見だからだ。対立したきっかけは？

涼宮ハルヒに関する主張において相違が見られたためである。

「森さん、機関でのハルヒの見解は、神様みたいな人物、であってますよね？」

「ええ、そうですが。」

「もし、ハルヒは神ではない、と主張する組織があったらどうなるでしょうか？」

そして、ハルヒに対する持論はそれぞれ異なる。

神だと主張する古泉に、

宇宙人もろもろは元々いたのだとする未来人。

「穏健派も強硬派も黙ってはいないですね。」

未来人にとって、世界が改変されると困るのは自分たちの帰属する時間軸に影響を及ぼすから。

朝比奈さんは機関と未来人が小康状態になってる未来から来ている。つまり、ここで強硬派が主導権を握って困るのは、異世界人もそうだが、未来人もそうなのだ。

でも、どうやって連絡をとるのが問題だ。

いや。当てはある。

すごく古典的な方法だが。

「森さん。ちょっと今晚北高にいつてきます。当てがあるので。」

夜に森さんと渡瀬さんに北高に連れて行ってもらう事になった。

めざすは文芸部。

本の中に朝比奈さん宛にメッセージをはさんでおけば将来SOS団の誰かが朝比奈さんに渡してくれるだろう。

メッセージには上司に今日の九時に来てくださいと伝えてください。それは、規定事項です。

という旨で書いてある。細かい事は彼女に伝えない方がいいだろう。森さんの協力もあって不法侵入はまんまと成功し、来てくれなかったらどうしようかと内心不安になりながら文芸部のドアを開けた。

「なんで、ここにいますか朝比奈さん。」

## 《幕間》暑い日に

暑い九月下旬のことだった。

中学一年生という俺たちは初めての文化祭という事もあって、わくわくする気持ちから、せわしなく準備を進めていた。

俺のクラスは「身の回りにある科学を実際に来場者に体験してもらう」という企画を打ち出し、中々の物を準備できたのではないかと思う。

クラスで目標に向かって一丸となる。

それは指導者、つまり、クラスの文化祭委員の手腕に関わってくるのだが、うちのクラスの委員はかなりやり手だった。

理想型とも言える団結力で効率的かつスピーディに準備を終わらせてしまったのだ。

他のクラスがえっちらおっちらやってるのを見ると、こいつがいてよかったなと思うことがある訳だ。

そして、えっちらおっちらやってるクラスには当然ハルヒのいるクラスが含まれており、あいつの不機嫌オーラはやはりジョンと出会う前と同じぐらいまで上昇していた。

「柳、ここにいたのね。」

ああ、ハルヒさん。その不機嫌オーラしまってください。

そんなに近くに来られると、俺の胃が血を吐きます。

「もう準備は終わったからな。お前のクラスは何するんだっけ。」

風に吹かれてハルヒの髪がなびく??なんて事は無い。今日は無風の快晴だ。おまけに昨日の晩に降った雨のせいで湿気が酷い。汗でびっしょりの額や首筋に黒髪が張り付いていた。これはこれで色っぽい。

「ただの展示よ。普通すぎるわ。」

「そりゃ、普通の中学だからな。不思議がそこら辺に転がってたら、それは不思議じゃなくて常識だ。」

それきり、俺もハルヒも押し黙ってしまった。そうよね、とハルヒがつぶやいた気がしたが、校舎から聞こえてくる騒がしい声にかき消されてしまった。

「おまえは、ここにいていいのか?」

「いいのよ、いてもいなくても結果は同じだわ。」

「一応、俺たちにとって初めての文化祭な訳だが?」

ハルヒは全くと言っていい程文化祭に興味を示してはいなかった。むしろ冷めた目で見ていた。

異世界で過ごしきった俺は恐らく高校は卒業しているのだろうが、いまここに居る俺は体感年齢的に中学生だ。

文化祭にわくわくぐらいうる。

だけど、ハルヒは全否定している。

文化祭に際して不思議を探すぐらひはするのかと思っていたが、どうやら原作による先入観が強いらしい。



こいつの中に巢食っている孤独は一体何者なのだろう。

将来的には、夏休みを何回もやり直してしまうくらいに”今”を大切にするようになるんだが。

「自分を肯定してくれる友達が欲しい」

そう望めば叶うだろう。こいつだから。

でも、自分がおかしいと認めてしまうくらいにこいつは常識的なのか。

「ハルヒ、その髪暑くないのか？夏になってから、髪を切った奴が随分居るが。」

まだ蝉が鳴いている。

飼育された蝉の寿命が二週間しか無い命を叫ぶように、籠の中にいるこいつは自分の存在を叫ばずにはいられない。

校庭落書き事件然り、

だが、ハルヒが羽ばたけば、世界は変わってしまう。容易く。

だから、その叫びは無視されてしまうのか。

少しぐらい、聞き入れられたって良いじゃないか。

世界とハルヒを天秤にかけたら、世界を取る奴ばかりだろう。

だが居たって良いじゃないか。ハルヒを取る奴が。

「ああ、これね。」

ハルヒは自分の髪の手を指に巻き付けて、くるくると回した。

「私が髪が長かったって言う事ぐらいは、ジョンも覚えていると思うのよ。だから、このままにしておくわ。そうしておけば、私って、わかりやすいでしょ？」

涼やかな風が吹き抜ける。

片隅に、よもぎの茶色い花が咲いているのを見つけた。

そうか、こいつにはジョンのことしか見えてなかったのか。

《幕間》暑い日に（後書き）

更新遅くてすみません。  
試験が多いのです。

## 未来人の掌中

「どうしてここに居るんですか？朝比奈さん。」

目の前の天使みたいな未来人の彼女はふふ、と笑みをこぼす。  
どこか苦笑いだが。

「あなたがここに来るように言ったのよ。」

俺はまだ呼び出す方法を実行してないんだが。  
まあ、これからやれば良いんだろう。

「ところで、そちらの方は？」

森さんが口を開く。警戒を怠っていない。

「未来人の朝比奈さんです。彼女に協力を得ようと思ひまして。」

この話を森さんは信じてくれるだろうか？

この時点で、朝比奈さんが俺に違和感を感じるだろう。  
どうして機関と未来側での涼宮ハルヒに対する見解が違っている事  
を知っているか、という事だ。

森さんにうっかり口を滑らしてしまったのは失策だったな。

まあ、それに合理性を持たせる為に日中頭を使っていた訳だが。

「朝比奈さん、七夕のときにジョンが俺に道を聞くように仕向けた

のはあなたですね？」

朝比奈さんは表情を変えずに肯定した。

「そのとき俺はジョンに北高に進学する事を勧められたんです。北高でしか楽しい事が起こる、とも言っていました。あのときあなたがそう仕向けたのだとしたら、そのときの彼もまた未来人という事になる。つまり、俺が北高に行く事は既定事項なんですよね？」

「ええ、正解です。」

それを言ってしまうて良いのだろうか？

「あなたがここで北高に進学する事に気付いてしまっても問題はありません。むしろそうでなくては困るの。詳しい事は禁則事項です。でも、あなたなら気付くでしょう。」

北高に入る前にまだまだ事件がある、という風に捉えられなくもない発言だな。

森さんと、ついについていた渡瀬さんも話題から取り残されすぎているな、この状況は二人に申し訳ない。

「俺とハルヒの置かれてる状況、いや、今の機関の現状をご存知でしょうか？」

「ええ。もちろんです。」

なら話が早い。

「協力してくれますか？」

俺は婉曲的に物事を進めるのは得意ではない。  
いろんな駆け引きとかも知ったこっちゃない。

なので、一息に展開を持って行こうとした訳だが、そこで待ったをかけた人物がいた。  
当然だろう。

「待ってください。朝の松原君の話と今の状況をあわせれば、つまり機関と未来人が対立するという事になるのでしょうか？」

森さんの発言に俺は何も言わずに朝比奈さんを見た。

気まずい。

俺を助けてくれた恩人二人を目の前で裏切る図になっているのだからな。

「形の上では、という事になります。未来人も既定事項を除けば過去に介入する事には消極的ですし、争っても無いも良い事は無いでしょう？」

渡りに船というのはまさにこのことを言う。

「強硬派の方達が涼宮さんと柳君に手を出すというのは、私たちがやらなければとても都合の悪い事です。この点では、穏健派の方達と意見が同じだと思うのですが。」

いくらか、余裕のある調子で語った。

一方、森さんに渡瀬さんは思案顔だ。

無理も無い。

強硬派には手を貸さないが、穏健派には手を貸す組織の登場なんて上手くできすぎている。

ましてや、いままで涼宮ハルヒを観察してきているのは機関だけだ  
と思っっていたんだ。

いきなり未来人が涼宮ハルヒの事を語りだしたって、井の中にいた  
蛙が海に放り出されたようなものだ。

「でも、柳君にちょっとお願いがあるんです。」

「なんでしょうか？ 未来人からお願い、というからには既定事項と  
かが絡んでるんでしょうね。」

「ええ、私としても出来ればこんなお願いしたくはないのだけれど・  
・・」

朝比奈さんは俯きがちになり、本当に言いたくなさそうだった。  
お願い、というのは大抵望みをかなえる為にする物なのにな。

「出来る限り早く、涼宮さんと離れてほしいの。高校に入って、涼  
宮さんがあなたの事を発見するまで、あなたには涼宮さんから全力  
で隠れてほしいんです。」

あるはずなのに、砂煙が舞ったような気がした。  
この人は何を言っている？

## 《幕間》寒い日の

冬休みに入る前だったと思う。

北高祭でジョンが見つからなかったのを契機に、ハルヒは方向性を変えたらしい。

期末考査が終わった週の日曜日に不思議散策をするとのことで、俺は今ハルヒの家の前にいる。

さむいなあ。

ポケットから渋々手を出しインターホンを押した。

「松原柳です。ハルヒさんいらっしゃいますか？」

「あ、柳？すぐ出るわ！」

元気なハルヒさんはそれだけ言うのと、すぐに玄関から飛び出てきた。

実は休みの日にこいつと会うのは夏休み以来だったりする。

大体学校で一緒に過ごしているから、必要な事はだいたいそこで済んでしまうし、

日々の不思議散策は放課後や登下校中で十分間に合っているだろう？

「さあ、いきましょ！不思議だと思う物はどんどん進言なさい！」

駅までの道をハルヒの歩調に気をつけながら歩く。

俺は無口なのだが、こいつは俺と一緒にいて楽しいのだろうか？

七夕以来一緒にいる事が多いのは事実だが、過ごす時間が長かった



て楽しいか楽しくないかは別物だ。

駅に着くまで会話は無かったがハルヒは上機嫌だった。

「すみません。」

女性から声をかけられたのは午前の散策の途中だった。

「なんでしょうか？」

愛想笑いしながら返答する。

ハルヒは「ちよつとまって！」とかいって何処かに言ってしまった。

寒い中で待たされつつけて、そろそろ鼻の先が赤くなってきたところだ。

「あなた、涼宮ハルヒと仲いいのよね？」

「あの、あなたは？」

長い蒼のロングヘアーに北高の制服。A Aランク+っていうのも納得するわこりゃ。

お分かりだろう。朝倉涼子だ。

「私、朝倉涼子って言うの。よろしくね松原君。」

何をよろしくなのか全くわからないが、とりあえず刺されたりは・・・  
・しないよな!?

「あなた知ってるでしょ？涼宮ハルヒが普通じゃないってことぐらい。超能力者の人たちからもアプローチを受けてみたいだし。」

表情は笑顔のくせにまるで笑っていない。

ただの不思議散策、しかも初回で宇宙人に出くわすなんてどんな確率だ。

さて、一般人を演じようか。

「あなた、やっぱりただの人間なのね。超能力者って訳でもなさそうだし、未来から来た訳でもなさそうだわ。うーん、ねえ、ちょっとさわってもいい？」

「ただの人間ですよ俺は！超能力もなければ、時間移動なんてもつての外です。というか、『さわってもいい？』とかあなたは一体なんなんですか！？」

どうだろう、俺の迫真の演技は。

「ふふ、そうね。でも、心当たりはあるんでしょう？超能力者とか未来人とか。」

「あつたらどうなんです？」

表情筋がピクリと動いてしまったのをこいつは見逃さなかっただろう。

心拍数の上昇も認めざるを得ない。

「もう少し、愛想良くした方がいいわよ。あなた分けわからないわ。そんな仏頂面が長門さん並に感情が読めないわよ。どう見ても一般

人なのに解析不能って一体何者なのよ本当に。」

朝倉さんはジーツと俺の瞳を覗いてくる。

目をそらしたい、でもそらしたら何か負けな気がする。  
頑張れ異世界人。宇宙人に負けるな。

「どうして涼宮さんと居るの？」

「へ？」

声がうわずってしまった。

「だって、あなたほとんど何もしゃべらないじゃないの。ただそばに居るだけ。それにあなたも楽しそうにしてるようには見えないのよ。」

確かにそうだ。

今朝、俺も同じ疑問を持った。

おれはハルヒと一緒に居るだけじゃないか？

「おーい！やなぎー！」

ハルヒがガゼルも吃驚の速さこっちにやってくる。

いや、こいつの場合捕食者だな。

「あら、きちやった。じゃあね、また会いましょ。」

優等生スマイルをふりまいて走り去って行った。

一体何がしたかったんだ。

宇宙人ってカミングアウトもなしだ。

「柳、今さっきの人誰？北高の生徒よね。でも女の子だからジョンではないわね。」

「さあ。ただの女子高生だろ。たぶん。」

午後の散策である。

「なあハルヒ、お前は俺といて面白いのか？」

「何よ急に。」

一気に不満顔になるハルヒにの頬を何の気無しにつついてみる。  
冷たくなっている。

「面白いわよ。それに、一人より二人の方が効率がいいわ！」

なるほど。合理的な考えだがなんか寂しいな。

「それに、あんた言ったじゃない。宇宙人や超能力者がいた方が面白いて。だからあんたに話を聞いてもらえると、私の考えがわかってもらえてるんだって思えるの。」

「そういうあんたはどうなのよ？わたしと一緒にいて楽しいの？柳はいつもあまりしゃべらないし、まあそれはそれで安心するんだけどね、だけど時々疑問に思うのよ。どうして私と一緒にいてくれるんだらうって。」

はあ、と俺は溜息を漏らした。

不安なのは俺だけじゃ無かったみたいだ。

しかも、今朝思い出したように疑問に思った俺と違って焦げ付いた  
悩みになっていたらしい。

「楽しいからだよ。お前は行動とか、考えとかおおよそ普通じゃない。  
もはや変人の域だしなあ。」

「なによ!」

変人という言葉がお気に召さなかったか?

「良いじゃないか。変人万歳。あらゆる意味でおまえは普通じゃない  
んだ。いいじゃないかそれで。それに比べて、俺は聞き役ぐらい  
しか出来ないからな。特に面白い訳でもないし、表情がわかりづら  
いって言われるし。」

ハルヒもはあ、と溜息を吐いた。

「まあいいわ!お互い一緒にいて楽しいなら、今日から私たちは親  
友よ!」

「相変わらず突拍子がないな。お前が不安になってるのはらしくな  
いしなあ。お前は突っ走ってればいいんじゃないか?」

「言われずともそうするわよ!じゃ、ちゃっちゃと次にいくわよ!」

俺のどの辺が面白いのかは全然わからなかったが、まあいいかと流  
す事にした。

周りと比べたら普通ではない日常に楽しみを見いだしてる事に変わりはない。

## 未来人の強行

「どうして、ですか？」

声がかすれてしまったのは致し方ない事だろう。

「すみません、既定事項なんです。そうでないと、今回の事は協力できません。協力しても意味がなくなってしまうの。」

自分でもわかっていたはずだ。

ハルヒはこのままではいけない。

物語的には楽しそうな状態ではなく憂鬱な状態が求められているのだ。

「でも、ハルヒはどうなるんです？ あいつ、学校では俺としか話さないんです。」

ここで、俺が断ったらどうなる？

まあ、俺が消されるだろうな。もしくは、原作を変えられるかもしれない。

しかし、俺は原作を変えたくないんだ。SOS団の皆でワイワイやってた方が楽しそうに決まってる。

なら、話は早いじゃないか。何を悩んでいる？

「私たちも困ります。」

森さんの毅然とした声が響く。

「七月に松原君と仲良くなってから、彼女の精神は以前より安定し

ました。閉鎖空間の・・・」

「大丈夫です。わかります。」

「閉鎖空間の発生回数も格段に減ったのです。もしいま松原君を引き離したらまた七月以降の状態に戻るでしょう。我々としてそれは避けたい。それに、やってる事が強硬派と変わりありません。」

口を引き結んだ森さんと、ふわりと笑う朝比奈さん。

今頃になって渡瀬さんが部室の扉をギイと閉めた。

「そこを使うのです。閉鎖空間の多発と涼宮さんの安全ではどちらを取るかは明白ですよね？」

「おかしな点がある。」

渡瀬さんが言った。

「涼宮さんには願望実現能力があるという。もし涼宮さんが柳君と離れる事を望まなければ柳君が彼女から離れることは無いはずだ。」

とうとう感付かれたか。もう少し遅いと思っていたんだが。

「柳君は涼宮さんの影響を受けないんです。そして、情報統合思念体の情報操作も・・・」

受けないんです、あたりで森さんの顔が口を引き結んだまま青ざめた。

そのまま三つの視線が俺に突き刺さる。

防衛本能が警鐘を鳴らす。首肯してしまっはまずい。



「そうなんですか？」

俺はどこからか来る優越感を抑えるのに必死だった。  
ちゃんとすつとぼけた顔が出来ているだろうか。

「ええ、そうなんです。だからどれほど涼宮さんがあなたと居たいと望んでも、それはあなたの意志次第で変える事ができる。それは穏健派も強硬派も喉から手が出る程欲しい能力でしょう？」

ですよね。

神に縛られずに生きる事が出来るんだから。

「ですが、ここで柳君がいなくなると困るのは未来人なんです。私たちは平和的に解決する事を望んでいます。柳君、どうにか受け入れてはくれないでしょうか？」

「それって『はい』以外の選択肢はありませんよね。」

朝比奈さんはにっこり笑い、森さんは硬直したまま動かず、渡瀬さんは真顔で何やら考えていた。

「わかりました、今学期が終わり次第何処かに転校する事にしましょう。北高入学後も俺の全力を使ってハルヒから隠れ続けましょう。その辺は面倒見てくれるんですよね？」

「転校なら、私が面倒をみよう。能力を持っているだけで一つの組織を相手にする少年、というのは倫理的にいただけない。未来人だ

ってずっと君を守ってられる訳ではないだろう。それに、未来人組織が機関に対抗するなら、涼宮さんに対する危害は少なくなったのではないか？」

「渡瀬さんっ！」

叫んだのは俺ではなく森さんだ。

「森さん、あなたはいつから強硬派になったんですか？」

ぐっ、と言葉を呑む森さん。悔しさ、いや痒いところに手が届かないような複雑な表情を仮面の隙間から見せている。スポンサーには手を出せない、か。

やはり、超能力者どもは思っているのだろうか？

涼宮ハルヒに振り回される生活はゴメンだ、と。

「渡瀬さん、お願いします。」

渡瀬さんはふと目にとまるような笑みをする人だった。

「それでは、いきましょか。」

森さんは黙ってしまった。

展開は穏健派ひっくり返るめて超能力者に悪くなる一方だ。

俺を助けてくれた命の恩人をこんな形で裏切る事になるなんてな。だからといって俺自身を機関に捧げるのもできないのだが。

「朝比奈さん、どこに行くんですか？」

「機関の人たちには宇宙人の存在も知ってもらわないと困るんです。天下三分の計でしたっけ？昔柳君が教えてくれたんですよ？」

俺はまだ何も言っていないんだけどなあ。

## 宇宙人の証明

708とボタンを押して話しかけた。

「すみません、朝比奈みくるです。柳君もいるのですが・・・」

インターホンの向こうからは何も返っては来なかったが、目の前の扉が開いたのは事実だ。

これから決闘に望む宮本武蔵みたいな顔をした森さんが始終俺と渡瀬さんを見ているのがいただけくない。

一応能力を使って武器を携帯してないか調べておくべきか。

高級マンションの割には個々の部屋のにインターホンが無く、何か抜けてるなと考えているうちに、朝比奈さんはコンコンと扉を叩いていた。

「こんばんは。入れてもらっても良いですか？」

「……」

制服姿の長門が奥に消えて行った。

おじゃまします。

「長門さん、あの・・・」

朝比奈さんはしどろもどろしながら口を開く。目を合わせたくないらしい。

「理解している。以前も言ったように二年後の私と今の私は同一人物。」

眼鏡を外し、黒曜石のような双眸が俺を直視した。

そのまま視線はゆったりと朝比奈さんと渡瀬さんをなぞり、森さんに固定された。

「情報統合思念体によって作られた、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース。それが私。あなたたちが行おうとしているのはとても愚かな事。我々は涼宮ハルヒを観測する事が目的。過剰な干渉があれば、いかなる勢力でも排除する。」

「しかし、宇宙人も未来人も結局は人間でしょう？」

「いえ・・・その認識はすぐに改めた方が良いでしょう。」

こんな状況で言うことではないが、お茶が呑みたい。  
乾燥した空気と霧囲気に、ちよつとした潤いが欲しい。

「朝比奈さんが未来人だとか、長門さんが宇宙人だという証拠が無いととても信じられませんよ。」

俺も文章上でしか知らないからな、是非見ておきたい。

長門は長いまつげに縁取られた目を二、三度ぱちくりさせると引き戸を指差した。

「あけて。」

俺が開けるのか？  
首を傾げると、

「先に森園生。」

もう森さんは扉に手をかけていた。

だが、開くはず無いんだ。

だってその部屋は、

「その扉につながる空間ごと情報操作により時間凍結してある。普通は開かない。」

こっちに目をやる。

何となくどうなるかわかった。

睡眠妨げてすみません、俺はおそろおそろ扉を開いた。

何の手応えも無くさっと開く扉に不安が膨らむ。

キョン君も朝比奈さん（小）もご丁寧な事に頭まで布団をかぶって眠っていた。

ほっと、溜息をつく。

「これが証明。私はヒューマノイドインターフェース。松原柳は情報操作を無効化できる。現在ここに居る朝比奈みくるの異時間同位体が眠っている。」

電気をつけて森さんが入って行く。

ハッと息をのむ音が聞こえる。

「わかりました、信じるしかなさそうですね。」

その声は彼女らしからぬものだった。

「それでは機関の強硬派と交渉しに行きましょう。そうするのが一番平和的ですよね？」

朝比奈さんが森さんに伺う。

数秒遅れて、「ええ」という返事が返る。

とんでもないものを敵に回してしまった、そう思っているのだろうか。

「長門さんも、ついて来てもらえますか？」

「かまわない。」

皆、無言で部屋を出る。

おじやました。

冷えきった空気を肌で感じていると、森さんは遠く向こうを見て、

「ところで、愚かな事とはどういう事でしょうか。」

と問うた。

「いづれわかる。」

シンプルな答えはカツンと響く靴音にかき消されてしまった。

## 超能力者の主張

俺に思いっきり暴力を働いた強硬派の連中と面と向かって話すというのは、中々にして勇気が居る。

長門が味方だからたぶん大丈夫だろうが、情報統合思念体も未来人も穏健派も、もはや俺の事をどう思っているかというのは予測するのが難しい。

冷えきった足を一步一步踏み出すが中々暖まらない。

「強硬派の連中と会うのに、俺がいてまた暴力沙汰になりませんか？」

「大丈夫です。強硬派もことの重大さに理解を示しましたから。」

話がすんなり通った事にどことなく違和感を感じたが、朝比奈さんも長門も何も言わないので大丈夫だろうと思い、自分を落ち着かせた。

車に乗って何処かの駅前のファミリーレストランに入った。

人払いをしたのだろうか。時間帯も頃合いなのにお客さんの姿は全く見えない。

と、思ったら奥の方に三人いるようだ。武器は持っていない。

「日下部さん、ずいぶんとお久しぶりですね。」

森さんが、三人のうちの一番大柄で貫禄のある男性にいった。



「悪いが、本題を聞かせてもらおうか。未来人の朝比奈さんに宇宙人の長門さんでしたかな？話は森から聞いたよ。」

始終尊大な態度で我を通す彼に少なからず嫌悪を覚える。

それは渡瀬さんも同じようであつては眉間が寄っていた。

「なら早速、話させていただきますね。あなたたちは涼宮さんを神のようなものとして認識なさっているのですが、私たち未来人は違った解釈をしています。」

森さんはピクリと動くが、強硬派は動じない。

それもそうか、神を実験しようとする馬鹿野郎どもだ。

「涼宮さんはもともと存在するものを発見する能力を持っている物だと考えているのです。つまり・・・元々涼宮さんの望む超能力者や宇宙人がいた、ということです。」

「そんなばかな！そんなことあるわけない、それに、」

唾を飛ばす日下部の発言を遮って、

「涼宮ハルヒの起こす情報爆発は我々にとっての進化の可能性。あなた達がむやみに行動する事は私たちの目的から外れる恐れがある。」

見事に対立した。

俺の目論み通りの展開だ。

穏健派に比べて強硬派は涼宮ハルヒの神格性をより軽んじているのか重んじているのかは性格に把握できないが、恐らく前者だろう。しかし、機関は『涼宮ハルヒは神のごとき存在である』という理論

が無ければ成立し得ない訳で、

「しかし、我々は涼宮ハルヒによって力を与えられた。それだけは確かだ。」

日下部はくわえていたタバコをこれでもかという程灰皿に押し付けた。

そのまま朝比奈さんを、次いで長門を睨みつける。

「君たちは我々と違って現実世界においても力があるのだろう。だが、我々はどうだ？ 現実世界ではただの人間で、組織になる事でのみ影響する事が出来る。未来人？ それなら些細な出来事をいじくるだけで、運命をねじ曲げる事が出来るのだろう。宇宙人？ 森の説明からするに、何でもありなのだろう。」

機関は常に涼宮ハルヒと宇宙人、未来人、この状況なら、異世界人の掌の上なのだ。

「我々はそちらの意見に真っ向から反論するつもりは無い。ただ、統合思念体がなんでもありだと言うのは間違い。涼宮ハルヒは周囲の環境情報を操作する力を有していると認識している。それだけなら、我々にも可能。」

長門は眼鏡をかけていなかった。家に置いてきたのだろうか。

「涼宮ハルヒは何も無いところから情報を生み出す力を持っている。それは統合思念体にはない力。故に我々は涼宮ハルヒを進化の可能性と定義し、これを観察する為にインターフェースを作り出した。」

日下部は長門の淡々とした長台詞の合間を縫うようにして、俺の方

を見遣り、

「君はどうなのだ？松原君。涼宮ハルヒからの干渉も受けず、ただの友人として過ごしてる君には我々と違って人権という物が与えられているだろう。干渉を受けないと言う点ではこの世界で君だけが唯一、人権を持っているのかもしれないが。」

ここで一つの問題が浮上するのだ。

俺の立ち位置は？俺はどこにいれば良い？

それぞれの勢力がハルヒに対しての定義を有しているにもかかわらず、

俺は明確な答えを持ってはいない。

ましてや、キョン君がいずれ行き着く定義でもない。

憧れるべき物語上のヒロインなのか？

「ハルヒはいろいろ言われてますけど、この世に一人しかない中学生ですよ。この世に一人しかない、と言う点はハルヒが変な力を持っているかいないかの問題じゃなくて、普遍的に、だれにでも当てはまります。ハルヒも結局は中学生なんですよ。俺の友人の一人です。」

それだけ言い終えて、誰かの腕時計から響く秒針の音が気になった。乾いた唇から、俺は模範的な答えを吐き出す。

「だから、あなた達が独善的にハルヒや俺を実験の道具にするのはどうかとおもいますよ。あなた達が人権を主張するように、俺たちだって主張します。」

「実験とはずいぶん聞こえが悪いじゃないか。我々の目的はただ、涼宮ハルヒのとは何者なのかを追究したいだけなのだ。」

「それが問題だと穏健派は主張しているのです。涼宮ハルヒの機嫌を損ねれば最後、世界が崩壊してしまう可能性だってあるのですよ！」

堰を切るように森さんが叫んだ。

「中学生の機嫌一つで崩壊せってしまう世界など崩壊してしまえば良い。掌で動かされている人間など、生きていないのと同義だ。」

反響する森さんの声の中に、確実に響き渡る重い声だった。

## 超能力者の埋没

「強硬派は心底うんざりしているのだよ。訳もわからない力を涼宮ハルヒという強大な存在によって押し付けられ、行使しなければ世界が滅びるなど、どこの冗談だという話だ。たとい世界が崩壊したって、我々は望むよ。神に縛られずに確かに生きていた一年前までの世界を。」

言い終えたとき、広がった空気は沈痛なものだった。

日下部は胸ポケットを探り、タバコに火をつける。

動作は非常に緩慢でライターに火をつけるのに三度程失敗し、ようやく成功した。

強硬派も、森さんも、渡瀬さんも皆顔を下に向け、どこでもないどこかを見つめている。

暖房が効いている訳でもないのに垂れてくる汗が黒いスーツにシミを作っていた。

「世界が崩壊して、その後に残される物は一体なんだというのです？ たとい私たちが掌で動かされていようとも、私たちは自分の意志で動いている。それも確実な事ではありませんか？」

森さんに続いて、渡瀬さんが言う。

「同情はします。しかし、掌で動かされているからといって世界を崩壊するのを傍観するというのはエゴが勝ち過ぎでしょう。あなたたち機関のエゴで、世界の何も知らない人たちの意思は蔑ろにされるのですよ？」

「むしろ、何も知りたくなかったさ。」

諦めたような、吐き出すような調子だった。

「俺たちのエゴは許されないのに、涼宮ハルヒのエゴは許容されるというのか！存在の大きさがちがう、ただそれだけの理由で！フランス革命において民衆が絶対的だった王を裁いたように、我々にも革命権はあるはずだ。」

長門がタイプライターを連打したような調子で突拍子も無く口を開いた。

紡いだ言葉の音は氷水のように、突き刺さる冷たさをもっていた。

「次元が違う。これだけは覚えておいてほしい。あなた達がそれを行使するとき、統合思念体は全力を持ってそれに対処するだろう。」

「私たち未来人もそうです。私たちも自分達の未来を守る事が何よりも先決なのです。既定事項から外れる事があれば、それこそあなた達と直接的に敵対する事は確実でしょう。」

有無を言わさぬ最後通牒だった。

結果として、強硬派は黙らざるを得なくなり彼らの言う人権も無視されるのだ。

俺だけが人権を持っている？

ふざけんな。

こっちもこっちで物語を順調に進めるのにどうしたら良い？と毎日毎日頭をひねらせているんだ。

いつまで自分の正体を偽らなくてはならないのか。

ハルヒが今楽しそうで問題ないのか？

物語における不和を改善しようともせず、ましてや介入しようとも

せず、来るべき出会いの瞬間の為に、誰にも強制されずハルヒに真実を黙り続けるひとりぼっちの俺の気持ちに誰にもわかるはずが無い！

世界が変わってしまったときに取り残されるのは恐らく、俺一人きりなのだから。

胸の奥底からじんわりと広がって行く怒りの炎が己が身を焼き尽くすかのように思われた。

水が欲しい、水が・・・

強硬派が立ち上がった。

もう話すべき事も無いだろう。

「手は引こう。だが忘れるな。我々がこの世界に不満を持っている事を。」

タバコはまたもや灰皿で押しつぶされてジュ、と苦い音を立てた。白い煙の描いていた線が消える。

「松原柳、だったか？」

「そうだ。」

喉の奥で潰したような声になってしまった。  
立ち去ろうとする日下部の手が俺の肩を掴む。

「良かったな、穏健派がお前の味方で。」

あまりにも強い力で掴まれたので、一瞬ビクリと震えてしまった。  
手はすぐに離され彼らは早々に立ち去った。

森さんは何やらもの言いたげな表情でその背中をじっと見つめていた。



## 異世界人の落着

「さて、帰ろうか。」

渡瀬さんが立ち上がりながら言った。

時計の針は既に12の数字をまたいでしまった。

「俺、一昨日から養護施設に連絡してないんですけど、どう説明したら良いですか？」

「コンビニで事故に巻き込まれたことを言えば大丈夫だろう。でも、細部は変える必要があるだろう。」

「誘拐でもされた事にすれば良いですか？」

「それですぐに帰ってきたら不審でしょう。警察に保護されていた事にしましょう。」

機関は組織されて一年未満のはずなのにすでにツテがあるんだな。

「世間的にコンビニの事件はこういう風に言われてるんですか？」

「強盗が入った事になってます。既に手を回しておきました。」

車を追突させる過激な強盗だと世間の目を相当引くだろうな。

学校に行ったときに、とやかく言われないと良いんだが。

「じゃあ、その場に中学生が居合わせた事にもなっているんですね。」

「ええ。」

森さんはすでに穏やかな微笑を浮かべていた。

ところで、今さっきから長門がこっちを見つめてくるのが異常に気になるんだが。

「あなたに話したい事がある。いつでも良い。また私の家に来て。」

今更だけど、思ったよりもはっきりとした口調で話すんだなあ。

聞き取れる最小音量で話す子だと思ってた。

そんな事を考えてるうちに、どこから取り出したのか眼鏡をかけ真顔になると、ファミレスから出て行ってしまった。

全ては終わった、という事だろうか？

「それでは、私も行きますね。また会いましょう。」

朝比奈さんもさっぱりとしたお別れだ。

それでも笑みを振りまく事を忘れてはいなかったが。

さて、俺も早く帰りたい。

「養子縁組の事なんだけどね、君が朝比奈さんに約束してたように今学期で転校するならそれに合わせた方が良いと思うんだ。」

夜も遅いので、渡瀬さんの家に一泊する事になった。

施設には警察（たぶん警察を名乗った機関の誰かだろう）から電話しておくとの事らしい。

一刻でも早く施設に帰って直接施設長さんに謝罪したかったが物事には手順があると、渡瀬さんになだめられた。

「そうですね。」

「今日施設長さんと話そうかと思っているんだけど、いいかな？」

いいかな？ も何もそこまでしてもらってすみません、と頭を下げなくなる。

しかし、あそこもお別れか。

何もかもが今日一日でいろいろ変わってしまうのだな。

生活環境、ハルヒに対する接し方、機関に対する、宇宙人に対する、未来人に対する印象。

いいや、ハルヒに能力について話してからと考えるとこの三日間か。傾けたグラスの水がこぼれそうになった。

「では、また会おう。」

施設に戻った後の事は省略させていただく。

あまり語りたくはない。

ただ、自分が本当に心配されていた事に少々の後ろめたさを覚えたただけにしておこう。

## 異世界人の中休

「柳！ここニ、三日来てなかったけど何してたのよ！施設の人たちは何も教えてくれないしさ！」

ここは素直に言うべきだろうか？

やはり、刃物のような鋭い冷たさを持った日だ。

たった数日で暖かくなる訳が無い。

ちよっと休んだだけなのに谷口とか圭介に久しぶりだなあと懐かしがられた。

それ以外のクラスメイトも俺の事をやたら見つめてくる。

なんだなんだ？

聞いてみると、一日目はまだ良かったらしいが、連続で休んだのがまずかったらしい。

ハルヒがまた邪神と化していたようだ。

クラスメイトから軽く崇められた。学校に登校しただけなのに。

「あまり人に聞かれたくないからちよっとついてきてくれ。」

「コンビニ強盗に巻き込まれたですって！？」

「そうなんだ。車がつっこんだだろ？」

「ニュースになってたわね。」

「だからちよつと病院で検査受けて、警察で証言してた。」

「なるほどねえ。」

ハルヒは考えるような表情をした。あれ、なんでだろう。嫌な予感がする。

口の先を尖らせて天井を睨みつけた。  
全然心配してくれないんですね、ハルヒさん。

「ねえ、その襲撃者って人間よね？」

「ああ、どう見ても人間だったし、日本語をしゃべってた。」

機関の人間だから、超能力者かもしれないけどな。

「どうして私たちは不思議を探してるのに見つからないと思う？」

一応、考えるフリをした。

どうやらハルヒの不機嫌オーラは今朝俺に会ってから収束したようだ。

「相手も地球人に見つからないように必死なんだろう。」

というか、ハルヒに、だが。

「今まではそう思ってたわ！でも見つけられないなら、呼び寄せれば良いのよ！」

「はあ!？」

大声を出してしまった。  
予想だにしてなかったからなあ。

「明日一時間半早く迎えにきて!早速呼び寄せるわよ!」

「何を？」

「不思議をよ!」

とつと俺を不思議認定してくれたら話が早いのかなあ。  
てか、既に呼び寄せてるじゃないか。

心の中で冷めている俺を誰が責められる？

まあ、いいか。

一息つく間も無いらしい。

いや、一息つきたい。

二日間も外泊してたんだ、疲れが取りきれないのは否めない。

「どうやって呼び寄せるんだ?大掛かりにしないと来なさそうだから二週間後ぐらいにやった方が良くと思うんだが。丁度三年も卒業して人も少なくなつて、仕掛けやすくなる。」

「そうね・・・考えてなかったわ。じゃあ、二週間後まで待つてなさい!内容は私が考えとくから!」

そう言つてハルヒは走り去つた。

ハルヒの背中に向かって叫ぶ。

「人様に迷惑がかからないようにしろよ!」

えらく足下が弾んでいるな。  
というか、教室に行くなら俺も連れて行けば良いのに。

二週間は思ったよりも早い。

しかし、春が近づいているという事を感じさせる。

コンビニ事件の被害者だという事は広まる事も無く、いたって普通の二週間。

ハルヒが悪い雰囲気出している訳でもないのに谷口と圭介は相変わらず俺のところで昼を食べるし、何の面白みも無い授業が手の平を返したように、急に面白くなったりする訳でもなかった。

「で、なんだこれ。」

ハルヒに手渡されたのはなんかのお札。「おさつ」じゃなくて「おふだ」。

ありがたくない。

「お札よ！これを学校に張りまくって宇宙人でも、未来人でも、超能力者でも呼び出すわ！決行日は週明けの月曜日よ！早く迎えにきなさいね！」

迎えに行くのは良いが、それでマジで来てもらっては困るよなあ。  
そういえば、まだ長門の家に行っていない。

「わかった。」

## 宇宙人の饒舌

本日は土曜日。

土曜日が休みっていいね、ゆとり教育万歳と思いつつ長門の家へ足を運ぶ。

「長門さん、話があるって言ってたよな？」

口元が「そう」と動いたように見えたが、実際に言葉は発せられなかった。

長門の家のリビングルームは机があるだけで本当に何も無い。

そして、話があると言ったのは長門のはずなのに、ただ俺の前で正座しているだけで何も話さない。

その沈黙が俺を困らせた。

「おーい、あの。長門さん？」

ダメだ、返事が無い、でも屍ではなさそうだ。

「返事ぐらいはしてくれないと、すごく困るんだが……」

と言うと、眼鏡越しに瞳がリビングの入り口の方を向いた。

「来た」と小さくつぶやいた気がした。

「ごめんなさい、遅れちゃって。久しぶりね、松原柳君。覚えてる？朝倉涼子よ。」

相も変わらず北高の制服を来て、自分の家のように座った。



「ああ、はい。覚えてますよ。」

「あのね、私も宇宙人なの。情報統合思念体とか難しい言葉使うより、こういった方がわかりやすいわよね？」

ええまあ。頷きで肯定の意を示す。

そうよね、こう言えば良いのよね。と、よくわからないつぶやきを漏らして、ふふ、と自然な笑みを浮かべた。

「私たちの役割は涼宮ハルヒの観察。これは長門さんから聞いていると思うから詳細は省くけど、私たちは涼宮さんだけでなくあなたにも興味を持っているのよ。」

「え？」

ポーカーフェイスのように笑顔から表情を変えない朝倉と無表情のまま、俺を見つめ続ける長門の間で、俺は役者モードに入った。

「わかっているでしょう？情報操作も涼宮ハルヒの影響も受けない存在であるあなたを放っておく訳けないじゃない。」

「そうなのか、長門？」

と、長門に尋ねてみれば、

「どうして私じゃなくて長門さんに聞くの？」

何か口を開こうとした長門を朝倉が遮る。

眉を寄せる朝倉の、まるでお手本のような困ったという表情に、なんとなく気味悪さを覚える。

「じゃあ逆に聞きますが、俺を呼んだのは長門さんなのに、どうして朝倉さんがそんな話をするんですか？」

たった一言で朝倉に笑顔が戻り、

「長門さんにはコミュニケーション能力が付与されていないの。だから、バックアップである私があなたに説明しているのよ。」

確かに長門に説明されても分けわからなかったかもしれない。

「そうですか。で、あなた達は俺に何を望んでいるんですか？」

超能力者は俺を拘束して良からぬ事を企んでいたし、未来人は自分たちの未来を導く為に俺も必要だと思っている。

「なにも。」

文章ではわからないかもしれないが、その言葉は冷淡ではなく、明るく弾んだ調子で紡がれた。

「私たちはただ観察するだけなのよ。涼宮ハルヒについても、あなたについても。だから私はあなたが涼宮ハルヒから離れる事を好ましく思っているわ。だって、あなたと仲良くなってからの涼宮ハルヒはとても面白くなかったんだから。」

その瞳は好奇心に満ちている。

「あなたが転校すると知ったら、どんな反応をするかしら。もしかしたらこの世界をリセットしてしまうかもしれないし、あなたの周

困を動かせばあなたが転校できない状況だって作り出せるに違いな  
いわ！大きな情報爆発が観測できる。私は、」

「ハルヒはそんなに子供じゃない。」

朝倉の発言を遮って、いつの間にかそんな言葉を発していた。

## 異世界人の饒舌

「どうして、そんなこと言うのかしら？根拠はあるの？」

冷めた声がした。

「ないよ。元々ある物じゃないんだ」

「なによそれ」

今度はむくれたような声。

そんな悪い意味で刺激的なオーラを出しながら、人差し指を唇に寄せて「わかんない」って顔されても困る。

「お前ら、北高の制服を着てるってことは、まだハルヒと直接会話したりしてないんだろ？」

今の人類じゃ考えもつかないオーバーテクノロジー使ってハルヒを知ってるんだろ？」

「そんなところかしら」

「それはな、ハルヒじゃないんだよ。ただのハルヒの情報だ」

「それがどうしたの？」

「どうしたって、ただの情報と本物の涼宮ハルヒの価値は天と地の差があるだろ？実際のハルヒを知ってる訳じゃないのに、なんでそんなこと言えるんだ？」

「あのね、涼宮ハルヒの生み出す情報にこそ涼宮ハルヒの価値なのよ？」

「だから、その情報を生み出すハルヒを保護するわけだ」

「別に保護している訳じゃないわ。私たちはただ観察するだけ。本当に、ただそれだけ」

「ハルヒじゃなく、ハルヒの情報を？」

「そうよ」

なんだよそれ。

きっぱりとした朝倉の断言に、情報統合思念体の糞野郎どもの限界を見た気がした。

しかし、その感覚はたちまち煙のように消えて全てを掴む事は出来なかった。

でも、言ってみるしか無い。

「なあ、感情って知ってるか？」

「もちろん知ってるわよ」

「じゃあ聞くんが、一人暮らしの女子高生は普通両親に会う事が出来ない。」

そんな時、その女子高生の思う事は何だと思う？

「それは、『寂しい』でしょ？」

「『寂しい』ってなんだ？　どういう風に？」

「自分の両親に会えなくて寂しい、一人でいるのが寂しい。そんなところかしら？」

「教科書に載ってそうな答えだな」

「事実そうでしょ？なんて答えたらお気に召したのかしら？」

「今さっきの答えを否定するつもりは無い。

でも朝倉からは『寂しいと感じたから寂しい』そんな答えが聞きなかったな」

「すごく陳腐だわ。答えになってないわよ？」

「たぶん『一人暮らしの女子高生は普通両親に会う事が出来ない』の部分に重点を置いて答えをつくったんだろ？

それも間違っていない。

人間同士相手の心情を推測する時によく使う手段の一つだしな。でも、誰でも感情を持つときってというのは原因からじゃなく、心から来るもんだ」

「それじゃあ、先に答えた答えで正しかったんじゃないかしら？きちんと答えたわよね？『寂しい』って。

あなたが『どういう風に？』って聞いたから原因を答えたまでよ？」

「どういう風に？」というのは普通原因を尋ねる為じゃなくて、何と言うか……様子確かめる為に使わないか？上手く表現できないが。

こじつけで悪いが、俺ら人間は普通、感情の説明を求められても

答えられないもんだよ。

「お前らには出来るかもしれないが」

一呼吸着いた。

俺のしているのはむちゃくちゃな話だが、俺の言いたい事は正確に伝わっているだろうか？

朝倉に答えを求めている訳ではないので、相手が口を開く前につばを飲んで次に言うべき事を言ってしまうおう。

「お前らは感情をもっているのか？」

## 宇宙人の不可能

「感情はあるのか？」と問うたときの朝倉に表情はなかった。

長門はいつも通り無表情なのだが、今さっきよりこちらをみているのは気のせいではないだろう。

「待って」

無表情のまま、長門が言った。

時計の秒針が三回カチカチと言うのを聞いた頃、朝倉に表情が戻ってきた。穏やかな微笑み。

「ごめんなさいね」

「いや、こっちも……やっぱり失礼だった」

俺の謝罪には興味が無いようで、「答えるわね」と朝倉がつぶやいた。

「確かに私たちには人類の感情と呼ばれるものはないわ。

それが何なのか、どのような情報なのか。私たちには知ろうとも思わない。

だって、そうじゃない？ 辺境惑星に生まれた知的生命体が肉体を持つが故のノイズ。そうとしか考えられないのよ」

なるほどな。確かに人間の三大欲求は身体に密接に関係している上に、感情に及ぼす影響も大きい。

暖房具が一つもないこの部屋はとても寒い。足が冷えてきた。そろそろお暇したいが、だ。



「でも、その定義だとさ、お前らの母体？情報統合思念体にはノイズが無かったとしても、身体思っているインターフェースなお前らにはノイズがあるって事になるんじゃないか？その辺どうやって捉えてる？」

「どうもこうも。私たちにはそんなものないわよ。あったとしても感知できる訳ないじゃない。元が違うんだから」

いや、それは絶対に違うだろう。『消失』が起こる原因になるんだから、エラーだろ？感知できないって、それこそ根本的に違うよな。エラーに気付いていない？人間と関わる機会が少ないから必要としていないだけか？

「うーん、じゃあわかる必要があるよな」

「不可能よ。人類がそれを重要視することはわかっているから、ほら、ちゃんと笑えてるでしょ？」

俺はハアとため息をついた。思った以上に重症だったようだ。

「いや、それじゃ根本的な事は何もわかってないぞ」

「別に良いのよ。涼宮ハルヒが観察できれば」

「まあまあ。ハルヒが高校生になるまでの三年程は北高に入学しないにも関わらずその制服を着続けるってことだろ？普通の服でも二人で買いに行ったらどうだ？管理人に不審に思われたらどうする？」

それもそうね、なんて朝倉は口にはださないがそう思ったらしい。

反応したのは、不審に思われたらどうするって所だけみたいだが。

「俺はそろそろ帰るよ。この部屋は寒い。家電とかカーテンとか調理具も買った方が良いな。それから、お客さんにはお茶ぐらいだしてくれ。頼むからさ。」

お前かららしちゃたいした事じゃ無いかもしれんが、この部屋も応対も一般ピーポーからすれば実はどん引きする状態だぞ。真冬なのに、暖房も入れないなんて。

おおよそ女子高生の部屋だとは思えん。今すぐ中学生からやり直してこい」

ああやばい、つい上から目線で言ってしまった。相手は何でもありな奴らなのに！

それにしても、前例を知っているからか俺の扱いがぞんざいすぎて少々へこむ。

前例？ いや、キョン君が来るのは三年後か。待て、『三年前の七夕』は過ぎてるから一応お茶を入れる能力はあるってことだ。

今時の高校生が家にアポ無しでやってきた奴に対して気を使うなんてことするのは知らないが。

逃げるが勝ちかな。

そそくさと立ち上がって二人に背を向けた。

「待って」

意外な事に声を上げたのは長門だ。

「連れて行って」

「へ？」

つつい素っ頓狂な声を出してしまった。

「どこへ？」

「買い物」

真剣な表情で長門さんがおっしゃった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1006t/>

---

異世界人の憂鬱

2011年12月17日21時17分発行